

平成 28 年度 文部科学省委託「幼児教育の推進体制構築事業」

『幼稚園・保育所・認定こども園等を巡回して指導・助言等を行う
「幼児教育アドバイザー」育成・配置に関する調査研究』

持続可能な「幼児教育アドバイザー」育成のための体制構築と展開

— 実践を核にした育成プログラムと研修体制の開発 —



平成 2 9 年 3 月

奈良市

本報告書は、文部科学省の幼児教育の改善・充実調査研究委託費による委託業務として、〈奈良市〉が実施した平成28年度「幼児教育の推進体制構築事業」の成果を取りまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。

はじめに

新しい幼児教育を支える保育者の資質向上をめざして

今、わが国の幼児教育は、新しい時代を迎えています。「すべての子どもに質の高い幼児教育・保育を提供する」という理念のもと、平成27年4月から、子ども・子育て支援新制度が施行されました。また、平成29年3月末には、新しい幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が告示されました。

奈良市では、これらに先立ち、平成27年3月に『奈良市立こども園カリキュラム（バンビーノ・プラン）』を策定し、同年4月より、市内こども園・幼稚園・保育園の全園に導入しました。いわば、新しい幼児教育の時代に適う質の向上に、いち早く取り組んできたと言えます。しかし同時に、課題もありました。10年を超える実践経験者の不足です。カリキュラムを活かし、質の高い保育実践を行うことができる保育者の養成が喫緊の課題だったのです。また、奈良市で培われてきた保育実践力をいかに次世代に継承していくのか、これも大きな課題となっていました。

そこで平成27年度に、文部科学省委託「幼児教育の質向上にかかる推進体制等の構築モデル調査研究」の指定を受け、「幼児教育アドバイザーの育成プログラムの開発：『奈良市立こども園カリキュラム』に基づく質の高い幼児教育に向けて」に取り組みました。その成果として、①15講座からなるセミナー（講習）、②自園や他園における活動実習、③途中経過を振り返る3回のスーパーバイズからなる幼児教育アドバイザー育成プログラムを完成させました。そして、12人の優れた幼児教育アドバイザーを輩出したのです。

この成果を受け、平成28年度、文部科学省委託「幼児教育の推進体制構築事業」の採択を受け、取り組んできたのが、本調査研究「持続可能な「幼児教育アドバイザー」育成のための体制構築と展開：実践を核にした育成プログラムと研修体制の開発」です。平成27年度に完成させた幼児教育アドバイザー育成プログラムをより効果的に継続実施していくために、育成した幼児教育アドバイザーが次のプログラム受講生への学びのつなぎ手となって、共に資質を向上させていく研修方法を開発しました。また、任意団体（奈良市立こども園会）と協働して研修体制を構築することで、全市の保育者が互いに高まり合う研修を実施してきました。そして、今年度も8人の幼児教育アドバイザーが誕生しました。

大きく変わりゆく時代だからこそ、保育者一人一人が幼児教育の質の向上に向けて意識を高くもつとともに、互いに学び合い、高め合う協同体の構築が不可欠です。子どもたちが今を十分に生き、明日を生き抜く力を育むために、幼児教育アドバイザーを核として、私たちみな力が結集し、新しい時代の保育をともに創り出していきたいと思います。

平成29年3月

奈良市幼児教育推進委員会

委員長 横山 真貴子（奈良教育大学）

目 次

はじめに

頁

第 I 章 研究の概要

1. 奈良市における幼児教育の推進体制構築と展開について	… 1
2. 研究の目的	… 1
3. 研究の内容	… 2
4. 研究の取組	… 2
1) 幼児教育アドバイザー育成プログラム	… 2
2) 分析・評価	… 4
3) 先進地視察	… 4
4) 奈良市私立園の実態調査と園訪問	… 5
5) 研究集会	… 5
5. 研究組織	… 5
6. 研究体制構造図	… 6
7. 成果と今後の課題	… 7
1) 4つの資質・能力を効率よく習得する方策の検討（研修方法の開発）	… 7
2) 全市の実践者が相互に高まり合う研修体制の構築（全市展開の研修体制の構築）	… 8
3) 持続可能な研修体制の構築	… 8
8. 応用と発展	… 9

第 II 章 幼児教育アドバイザー育成プログラム

1. 幼児教育アドバイザー講習	… 11
2. 幼児教育アドバイザー講習の実施	… 12
1) 『奈良市立こども園カリキュラム』に関する専門的知識	… 12
講座 1 『奈良市立こども園カリキュラム』の全体構成と幼児教育の位置づけ	
講座 2 『奈良市立こども園カリキュラム』の理念と内容	
2) 国の動向を見据えた奈良市の教育・保育のカリキュラム・マネジメント	… 15
講座 3 『幼稚園教育要領改訂に向けて』内容の理解	
講座 4 『保育所保育指針改訂に向けて』内容の理解	
講座 5 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領改訂に向けて』内容の理解	
講座 6 『奈良市立こども園カリキュラム』とカリキュラム・マネジメント①	
講座 7 『奈良市立こども園カリキュラム』とカリキュラム・マネジメント②	

3) 実践の指導：実践者・実践園への指導・助言	… 28
講座 8 実践者・実践園への指導助言の要点	
講座 9 実践者・実践園への指導助言の実際	
4) 実践の指導：カンファレンスの進行と統括	… 35
講座 10 カンファレンスの進行と統括の要点	
講座 11 カンファレンスの進行と統括の実際	
5) 研修の企画・運営と総括	… 44
講座 12 研修の企画	
講座 13 研修の運営	
講座 14 研究集会における研究成果の発表と評価	
講座 15 総括：実践研究における熟達過程の省察	

第三章 幼児教育アドバイザーの実践開発

研究テーマ：「学び合うために」～取得した専門知識を活用した実践と協働的な学び～

1. 研究テーマの設定理由	… 55
2. 実践研究	… 55
1) カリキュラム理解と要領指針の改訂から見てきたもの	… 55
2) 事例部会研修会の進行・統括	… 59
3) カンファレンスの進行・統括	… 67
4) 『奈良市立こども園カリキュラム』の解説を通して	… 71
5) 自園指導を通して	… 76
6) 研究集会の企画・運営	… 81
3. まとめ	… 83
4. 2年目幼児教育アドバイザーの役割	… 84
1) 保育所職員から幼稚園副園長へ配属された幼児教育アドバイザー	… 84
2) 保育所副園長歴3年目幼児教育アドバイザー	… 85
3) 幼稚園副園長歴4年目幼児教育アドバイザー	… 86
4) こども園副園長歴2年・幼稚園副園長歴2年目幼児教育アドバイザー	… 87

第四章 評価

1. スーパーバイザーの役割と評価	… 89
1) 行政職スーパーバイザーの役割と評価	… 89
(1) 保連携型こども園への再編・移行に向けての行政アドバイザーの役割について	
(2) 幼保連携型こども園への行政アドバイザーの主なサポート内容	

2) 園長職スーパーバイザーの役割と評価	… 90
(1) 他園での実習について	
(2) 幼児教育アドバイザーの育成について	
(3) 今年度の調査研究について	
3) スーパーバイズ（面接）	… 92
(1) アドバイザーの変容と評価	
(2) 考察	
(3) 成果と課題	
4) 幼児教育アドバイザー所属園による評価	… 95
2. 外部評価	… 96
1) 先進地視察	… 96
2) 奈良市私立園実態調査と園訪問	… 97
(1) 奈良市私立幼稚園・こども園・保育所の状況	
(2) 私立園への啓発と連携	
 第V章 総合考察：成果と今後の課題	
1. 主な結果	… 101
2. 応用と発展	… 105
3. まとめ	… 105
 (資料編)	
資料1 年間計画表	
資料2 年間実施内容	
資料3 平成28年度奈良市こども園・幼稚園・保育園職員研修体制表	

I 研究の概要

平成 28 年度 文部科学省委託 幼児教育の推進体制構築事業

持続可能な「幼児教育アドバイザー」育成のための体制構築と展開 — 実践を核にした育成プログラムと研修体制の開発 —

1. 奈良市における幼児教育の推進体制構築と展開について

奈良市では「発達と学びの連続性を踏まえた教育の推進」を教育のビジョンに掲げ、「子ども・子育て支援新制度」が開始された平成 27 年度から順次、市立の幼稚園・保育所・既設のこども園を新たな「幼保連携型認定こども園」に編成する計画を進めている。平成 28 年度には、幼保連携型認定こども園を 9 園開園し、幼稚園・保育所・こども園のいずれにおいても、質の高い幼児教育を実施することを目指している。

これまで奈良市では、平成 22～26 年度には、文部科学省から「幼児教育の改善・充実調査研究」の委託を受け、幼保一体化を視野に入れ、幼稚園教員等保育者の幼児教育の実践における資質向上を積極的に図ってきた。その成果として、幼保合同の研修体制の充実や幼保の相互理解が格段に進むと共に、幼児期の教育と小学校教育の接続の在り方を定めることができた。さらに、平成 25～26 年度には『奈良市立こども園カリキュラム』（以下、「カリキュラム」）の策定を進め、平成 26 年度末に完成をみた。

一方で、奈良市における喫緊の課題の一つに、400 名を超える保育者のうち、10 年を超える幼児教育の実績経験者が不足していることが指摘できる。そこで平成 27 年度には、文部科学省から「幼児教育推進のモデル調査研究」の委託を受け、「カリキュラム」の研修を重ねながら、本市全域への質の高い幼児教育の普及、提供を目指し、幼児教育に関する指導的役割の中核を担う「幼児教育アドバイザー」の育成を進めてきた。

続く平成 28 年度は、新たに文部科学省から「幼児教育の推進体制構築事業」の採択を受け、さらなる幼児教育の質の向上と人材育成を目指して調査研究を進めていくこととなった。本調査研究では、前年度の「幼児教育アドバイザー育成プログラム」をミドル級の育成システムとして明確に位置づけ、実践をプログラムの核として、園内及び市研修ブロック間で保育者同士が相互に高まり合い、市全体として持続可能なアドバイザー育成の研修体制の構築を目指すこととした。

2. 研究の目的

本調査研究は、平成 27 年度に本市で開発・施行した「幼児教育アドバイザー育成プログラム」を継続実施し、そこで育成した「幼児教育アドバイザー」やスーパーバイザーに、幼児教育アドバイザー受講者のサポートを委ね、継続的に人材育成を図る組織体制及び研修体制を構築することを目指す。具体的には、「幼児教育アドバイザー育成プログラム」において育てたい 4 つの資質・能力を、実践現場で効率よく習得するための研修方法の開発と、幼児教育アドバイザー育成を全市に広げ、継続するための研修体制の構築を目的とする。

3. 研究の内容

本調査研究では、前述の目的を達成するために、以下の3つの内容について研究を進める。

- (1) 「幼児教育アドバイザー育成プログラム」で育てたい4つの資質・能力を、実践現場で効率よく習得するため研修方法の開発
 - ・実践上の課題で学びを生かし、受講者の資質・能力を高める。
- (2) 全市の教育・保育実践者が相互に高まり合う研修体制の構築（全市展開の研修体制の構築）
 - ・市全体を4つのブロックに分け、各ブロックに幼児教育アドバイザー受講者（以下アドバイザー受講者）（8名）、2年目幼児教育アドバイザー（4名）、スーパーバイザー（現職園長4名）を配置し、異なる経験年数の実践者が、それぞれの立場から相互に高まり合う研修体制を構築する。
 - ・私立こども園・幼稚園・保育所の実態調査と園訪問、市内研修の参加を進める。
- (3) 持続可能な研修体制の構築
 - ・育成した幼児教育アドバイザーの活用方法について明らかにするとともに、初任者から管理職まで、実践者のキャリア形成の道筋を明らかにする。

4. 研究の取組

本調査研究では、幼児教育アドバイザー育成のために「幼児教育アドバイザー育成プログラム」を展開し、その成果を「分析・評価」した。また、福井県への「先進地視察」を実施し、見識を広げ、深めると共に、「奈良市私立園の実態調査と園訪問」を実施し、市内の幼児教育の実態を把握に努めた。さらに、これらの成果を「研究集会」で発表した。以下、各項目について述べる。

1) 幼児教育アドバイザー育成プログラム

○幼児教育アドバイザーに必要な資質・能力

以下4点の「幼児教育アドバイザーとして必要な資質・能力」に基づく育成プログラムを編成した。これら4点の資質・能力は「幼児教育アドバイザー講習」の15講座の他、面接等におけるスーパーバイズ等の省察・評価の観点にも反映させた。

●カリキュラムの理念と内容に関する専門的知識の保有（知識）

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』並びに『奈良市立こども園カリキュラム』について、カリキュラムの特徴、構成、理念、内容について理解し、カリキュラムにおける幼児期の教育の位置づけと必要性について、発達の観点と教育的意義から実践に照らして理解した上で、実践への活用の在り方を理解し、解説することが求められる。

●実践上の課題に応じて指導・助言する能力（実践）

指導計画の作成から実施、評価に至るまで、実践者の実践上の課題、短期的長期的な課題、指導計画との整合性、援助や環境構成、保育の記録と評価について、実態に応じて複合的輻輳的に指導・助言する能力が求められる。

●教育・保育実践者の資質・能力を高める研修を企画・運営する能力（研修）

園内研修や合同研修（公開保育を含む）は、教育・保育実践者の資質・能力を高めるのに有効な機会であり、幼児教育アドバイザーには研修の場を活用して、適切で効果のある指導・助言を行うことが期待される。時宜に応じた教育や研修参加者自身の課題を捉え、研修を企画・運営する能力が求められる。

●実践研究を推進・統括する能力（研究）

アドバイザー受講者が、自園や他園の実践の場で進めてきた取組から実践研究を適切に遂行し、統括的役割を果たす能力が求められる。

○幼児教育アドバイザー育成プログラム受講者

本プログラムをミドル級の育成システムとして位置づけ、副園長を対象とする。

○幼児教育アドバイザー育成プログラムの構成

「幼児教育アドバイザー講習」、「幼児教育アドバイザー活動実習」、「スーパーバイズ」の3つからなる。

①幼児教育アドバイザー講習

幼児教育アドバイザーに必要な4つの資質・能力（「知識」「実践」「研修」「研究」）の内容から、表1の15講座を編成し、実施した。講座の内容は「知識」を中心としながら、「実践」「研修」「研究」を総合的に習得し、基本的な力量の形成を図るものである。今年度は、特に幼稚園教育要領等の改訂に伴い、国の動向を視野に入れたカリキュラム・マネジメント力の育成も図った。

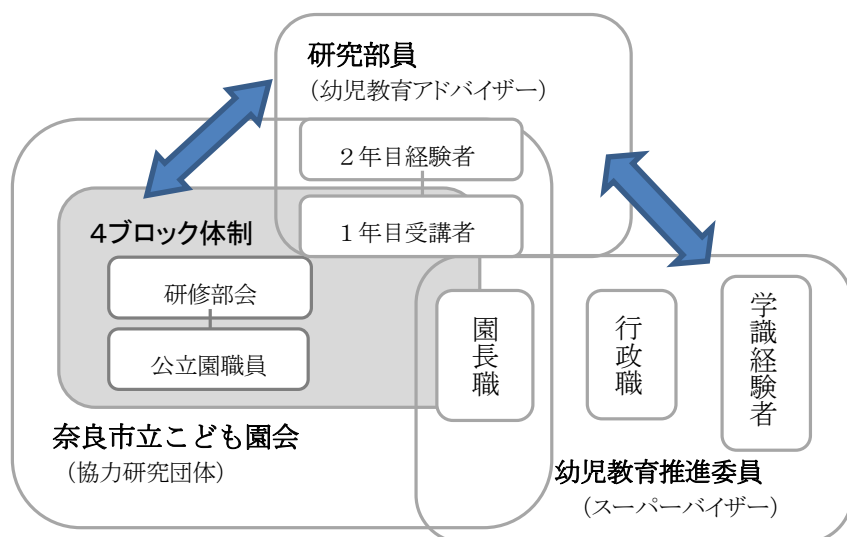
研修形態には「講義」「ワークショップ（WS）」「演習」「実習」の4形態を設けたが、今年度は、実習以外の講座においてもワークショップ（WS）を実施し、幼児教育アドバイザー同士の意見交換や分析の時間を設けた。さらに今年度は、アドバイザー受講者の副園長としての立場を生かし、自園等の実践現場で活用できるよう講座内容の編成を工夫した。

表1 幼児教育アドバイザー講習の内容

講座名	テーマ	形態	主要な資質・能力			
			知識	実践	研修	研究
講座1	『奈良市立こども園カリキュラム』の全体構成と幼児教育の位置付け	講義	◎			
講座2	『奈良市立こども園カリキュラム』の理念と内容	講義・WS	◎			
講座3	『幼稚園教育要領改訂に向けて』内容の理解	講義・WS	◎			
講座4	『保育所保育指針改訂に向けて』内容の理解	講義・WS	◎			
講座5	『幼保連携型認定こども園教育・保育要領改訂に向けて』内容の理解	講義・WS	◎			
講座6	『奈良市立こども園カリキュラム』とカリキュラム・マネジメント①	WS・演習	○		◎	◎
講座7	『奈良市立こども園カリキュラム』とカリキュラム・マネジメント②	WS・演習	○		◎	◎
講座8	実践者・実践園への指導助言の要点	講義・WS	◎	○	○	
講座9	実践者・実践園への指導助言の実際	実習	○	◎	◎	
講座10	カンファレンスの進行と統括の要点	講義・WS	◎	○		
講座11	カンファレンスの進行と統括の実際	実習	○	◎	◎	
講座12	研修の企画	WS	○	◎		
講座13	研修の運営	実習	◎	◎	◎	
講座14	研究集会における研究成果の発表と評価	実習	◎		◎	◎
講座15	総括：実践研究における報告と熟達過程の省察	演習	◎			◎

②幼児教育アドバイザー活動実習

幼児教育アドバイザー講習において習得される資質・能力を園の実情や実際に即して応用し、総合的に活用するために、アドバイザー受講者は「幼児教育アドバイザー活動実習」として、勤務する自園及び他園においてアドバイザー活動を行った。今年度は、さらに講習の「実習」を実践の場で展開できるように、自園・他園での実習を可能とする組織の拡大を図った。市内を4ブロックに分け、そこにアドバイザー受講者とスーパーバイザー（現職園長）を配置し、市立園51園で構成される研究団体「奈良市立こども園会」と連携することで、多様な経験を通してアドバイザーを育成することを試みた。



③スーパーバイズ

幼児教育アドバイザー育成プログラムには、他の実践者への指導・助言や研修の企画・運営など、多様な実習が組み込まれている。保育現場での実習は、指導対象も多様であり、指導内容も一律に是非を判断することは難しい。そのため、アドバイザー受講者一人一人に対して、スーパーバイザーのチームを配置し、講習や活動実習と並行してスーパーバイズを実施した。

スーパーバイザーのチームは、学識経験者、行政職、現職園長の3者から編成し、多様な専門性から幼児教育アドバイザーの育成を支えた。各活動は、スーパーバイザーの専門性を生かし、「幼児教育アドバイザー講習」は学識経験者、「自園での実習」は行政職、「他園での研修を通じた実習」は現職園長が担当し、「スーパーバイズ（面接）」は、全スーパーバイザーで実施した。

2) 分析・評価

①幼児教育アドバイザー受講者の自己評価

- ・幼児教育アドバイザー講習の各講座後に自己評価シートを作成
- ・事業開始時及び最終時期に実施した面接用シートの作成、及び自己評価
- ・実践研究の報告書作成における研究総括

②スーパーバイズによる評価

- ・面接での各幼児教育アドバイザーに対する評価
- ・自園での実習についての評価
- ・他園での実習についての評価
- ・幼児教育アドバイザー受講者所属園長による評価

③外部評価

- ・福井県への先進地視察を実施
- ・学識経験者の招聘による幼児教育アドバイザーの資質向上に関する指導・助言、及び問題提起

3) 先進地視察

福井県における幼児教育研修システムの構築「学びをつなぐ希望のバトンプロジェクト」を視察し、幼児教育アドバイザーの役割について理解を深め、今後の展望をもつと共に、研究への意欲を高めた。

- 1回目：視察園 福井県「鯖江市立ゆたかこども園」視察
- 2回目：福井県立大学 交流センターで実施の研修フォーラムに参加

4) 奈良市私立園の実態調査と園訪問

奈良市の幼児教育推進を図るため、関係機関との連携も視野に入れ、私立園との連携に向けた調査・訪問を実施した。

①奈良市の私立幼稚園・保育所・こども園の実態調査

- ・雇用状況、教育・保育者の年齢構成、研修参加の状況等についてアンケート調査を行い、実態を把握する。

②2年目幼児教育アドバイザーとスーパーバイザーによる奈良市の私立園への訪問

- ・私立幼稚園・私立保育所・私立幼保連携型認定こども園

5) 研究集会

今年度の事業取組の総括として、「研究集会」の企画・運営及び実践研究報告をアドバイザー受講者が全て実施した。研究集会の参加対象を広げ、私立園にも参加を呼びかけた。また、参加者の経験や課題、目的に応じて進行や展開を工夫し、研修を円滑に実施できるようにした。

<実施内容>

- ・アドバイザー受講者による企画・運営の実施
- ・アドバイザー受講者による「研究実践発表」
- ・参加者による「グループ協議及び報告」
- ・奈良市幼児教育推進委員（学識経験者スーパーバイザー）による「指導助言」
- ・幼児教育推進委員 委員長による「講演」
- ・参加者対象の事後アンケート調査の実施

5. 研究組織

○奈良市幼児教育推進委員会 推進委員 8名

幼児教育を専門とした学識経験者 4名

市立幼稚園園長 2名

市立保育所園長 1名

市立こども園園長 1名

○研究部員 12名

市立幼稚園副園長 6名

市立保育所副園長 4名

市立こども園副園長 2名

○市長部局

こども園推進課主査 1名

こども園推進課主任 1名

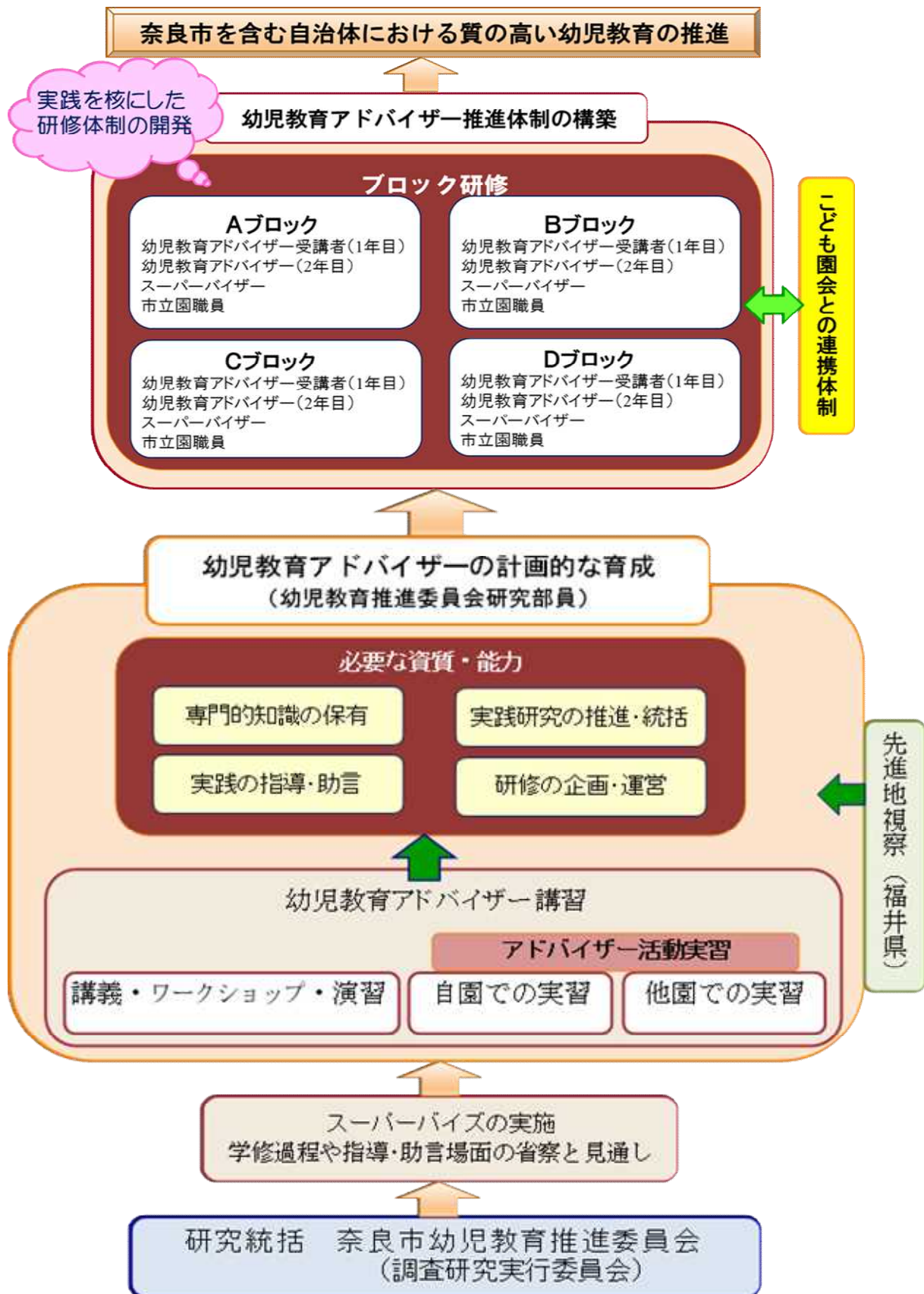
こども園推進課職員 4名

○協力研究団体

奈良市立こども園会（市立園教員等から構成された団体組織）



6. 研究体制構造図



7. 成果

本調査研究では、「幼児教育アドバイザー育成プログラム」を実施し、幼児教育アドバイザーとして必要な4つの資質・能力を実践の場で効率よく取得するための研修方法の開発と、幼児教育アドバイザー育成を全市に広げ、継続実施するための研修体制の構築に取組み、以下の3つの成果を得た。

1) 4つの資質・能力を効率よく習得する方策の検討（研修方法の開発）

(1) 実践を核とした、対話を通して学び合う研修

① 対話による学び合い：グループ協議の積み重ね

「幼児教育アドバイザー講習」（15講座）において、実習以外の講義、演習の前後には、ワークショップを実施し、受講者が互いに意見交流を行う時間を設けた。それにより、受講者が主体的、自発的に課題の分析を行ったり、今後の方向性を見出す姿が見られるようになった。

② 実践を核にした研修：継続的な知識と実践との往還

実践を核に置き、講義等で得た知識を、実習や研修企画という形で実践の場で生かす機会を設けたことが効果的であった。

《実践の場で効率よく資質・能力を習得する工夫》

○まずは講習を通して、実践で生かせる基本的な知識を身に付ける。

- ・不確かなことを確かなものにし、前向き、かつ主体的に実践に臨めるようにする。
- ・少人数でワークショップを行い、実際に行ってみることでより理解を深める。

○講習で得た知識や技能を活用して、実践を通して確かな力量を身に付ける

- ・実践を通して自身の課題を明らかにし、反省・評価を行いながら改善に向けて取り組む。
- ・熟達度の異なる研修参加者や他園の職員などとやり取りする中で、新たな刺激を得ながら学び、多様な他者への対応力を身に付ける。
- ・実践編（他園での公開保育・自園）、理論編（事例研修会）と、異なった研修内容の場で実践を積み重ねることで、様々な角度からの知識・技能を習得する。

○受講者同士のつながりが学ぶ意欲を高め、学びを支える

- ・幼児教育アドバイザー講習において、グループによるワークショップを重ね、受講者間に信頼関係、連帯意識、協働性を育む。

(2) タテとヨコから受講者を支える組織体制

アドバイザー受講者は、スーパーバイザーと共に、2年目幼児教育アドバイザーからも支援を受けた。いわば、タテ（スーパーバイザー）とヨコ（2年目幼児教育アドバイザー）からの二重の支援である。

① タテの支援：気軽に相談できるスーパーバイザーの存在によって、安心して実践研究に臨むことができた。また、本年度は特に行政職スーパーバイザーがアドバイザー受講者の所属園を訪問し、悩みや不安、迷いを受け止め、支援した活動が有効だった。

② ヨコの支援：2年目幼児教育アドバイザーが大半の講座を共に受講し、昨年度の経験を伝えることで、アドバイザー受講者は見通しをもって実践に臨むことができた。2年目幼児教育アドバイザーの経験談から、アドバイザー受講者は「気づき」や「課題改善」の糸口を学んだ。

(3) 定期的なアンケートによる振り返りが促すアドバイザーとしての成長

① 学びや成長を実感しながら、研修に臨む：各講座後にアドバイザー受講者等へのアンケート調査を継続的に実施した。その結果、アドバイザー受講者の自己評価は講習後より実践後の方が高くなっており、実践を通して成長を実感していることが明らかとなった。

- ② **客観的な立場からの評価の重要性**：事業開始当初と最終時期の評価を比べると、アドバイザー受講者の自己評価よりも、スーパーバイザーによる評価の方が成長差幅が大きかった。アドバイザー受講者によって評価の基準が異なる上、学べば学ぶほど、知識の不足を実感し、自己評価が厳しくなることもある。そのため、客観的に成長を評価し、サポートするスーパーバイザーの役割の重要性が確認された。

2) 全市の実践者が相互に高まり合う研修体制の構築（全市展開の研修体制の構築）

(1) 既存の組織と連携しての多様な保育者が高まり合う研修の実施

本調査研究では、本市全域で教育・保育力の質の向上を図るために、「奈良市立こども園会」の研修に幼児教育アドバイザー受講者及びスーパーバイザーを配置し、「奈良市立こども園会」主催のブロック研修会において、アドバイザー受講者がグループ協議での進行・統括の実習を行った。以下、その成果の具体である。

- ① 経験年数や園種が異なる教員等と意見を交わし、幼児の発達に即した援助や環境構成の工夫等について議論を行ったことで、互いの資質向上につながった。
- ② アドバイザー受講者が進行・統括を行うことで、他の教員等や副園長へ事業内容や幼児教育アドバイザーの役割について周知することが可能となった。
- ③ アドバイザー受講者と副園長がペアを組んでカンファレンスの進行・統括を行うことで、次の幼児教育アドバイザー候補生である副園長に学びを広げることが可能となった。

(2) 奈良市の子供の姿から学ぶ研修の実施

「奈良市立こども園会」主催の公開保育研究会や事例研修会では、奈良市の子供たちの実際の姿を通して、保育実践について議論し、保育の質の改善に向けて検討を重ねた。参加者も、身近な子供の事例に、所属園の子供の姿を思い浮かべながら議論に加わることができ、積極的、意欲的に気付きや考えを出し合うことができた。また、そうした議論の結果を翌日の保育に生かすなど、直接的に本市の保育の質の向上にもつながり、有効な取組であった。

3) 持続可能な研修体制の構築

(1) 行政と任意団体との協働的な組織体制の構築

上記2) で記したように、「奈良市立こども園会」の研修体制に、幼児教育アドバイザー活動を位置付け、既存の研修体制と幼児教育アドバイザーの育成プログラムを重ね合わせた協働的な組織体制の構築を図った。具体的には、本市は園数が多いため目的に応じて、下記のように組織を再構成した。それらをつないでいくことが幼児教育アドバイザーを生かした質の向上に有効であり、持続的な育成のために必要な体制と考えた。

<組織全体>

- ・行政と任意団体とが連携を強化し、両者の研修計画を重ね合わせることで、研修内容を豊かにする
- ・アドバイザー受講者の活動の定着を図る

<ブロック研修>

- ・市立園 51 園を 4 ブロックに分け、市の教員等の研修参加率を上げる
- ・市全体への幼児教育アドバイザーの役割や位置付けの周知を図る
- ・多様な実践者と意見を交わすことで、アドバイザー受講者の対応力向上を図る

<小規模組織>

- ・小規模での組織連携：それぞれに役割を担い進行する
 - ・本事業からスーパーバイザー（現職園長）と幼児教育アドバイザー
 - ・奈良市子ども園会から各研修の担当研修部長（園長）・副部长（副園長）
 - ・4ブロックの各園から実践者が研修に参加
 - ・私立園の参加

<個人>

- ・年度の初めに各実績経験年数に分けたステージ制の「つきたい力」を明記した一覧表を配布し、一人一人の教員等が自分なりに目的を持って研修に臨む

(2) 人材育成の循環

スーパーバイザーに加え、2年目幼児教育アドバイザーを活用することで、以下の3点の成果が見られた。

- ① アドバイザー受講者の悩みや課題に対する細やかなサポートが可能になり、アドバイザー受講者が課題解決の糸口を見出すことにつながった。
- ② 継続的なサポートによって、アドバイザー受講者本人が目指す目標が明確になった。
- ③ アドバイザー受講者の所属園への支援訪問が、園全体への支援にもつながった。

8. 応用と発展

1) 4つの資質・能力を効率よく習得する方策の検討（研修方法の開発）

- ・**選択履修型研修の導入**：本事業では、1年間15講座で4つの資質・能力を全般的に習得する育成プログラムを展開した。次年度は、1つの資質・能力の習得に向けてじっくりと取り組み、学びを深めることも可能としたい。そのため、受講期間を2年間とし、自身が付けたい力を選択して受講に臨む、受講者の主体性を重視した選択履修型研修の導入を図る。
- ・**3段階のステップ制の導入**：資質・能力の内容を3段階に階層化することで、力量形成の道筋を明確化する。

2) 全市の実践者が相互に高まり合う研修体制の構築（全市展開の研修体制の構築）

- ・**対象者の拡大**：上記履修型研修の対象者を市立園の全副園長と国立・私立園職員に広げ、市内全域で学び合う研修体制の構築を図る。
- ・**実践記録の形式の改善**：アドバイザー受講者が自身の資質向上を実感して学びを広げる役割が担えるよう、実践研究の記録形式を成長過程が描き出せるように改善する。

3) 持続可能な研修体制の構築

- ・**育成したアドバイザーの活用促進**：3年目、2年目の幼児教育アドバイザーが、アドバイザー受講者を支え合う体制の充実を図り、支え合い、学び続ける研修体制の構築を目指す。
- ・**スーパーバイザー同士の連携強化**：次年度は「スーパーバイザー会議」を実施し、アドバイザー受講者の成長過程等について十分情報交換を行い、サポート体制の充実を図る。

Ⅱ 幼児教育アドバイザー育成プログラム

1. 幼児教育アドバイザー講習

幼児教育アドバイザーに求められる必要な資質・能力として、次の4点に基づいて、育成プログラムを編成した。

(1) カリキュラムの理念と内容に関する専門的知識の保有

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』並びに『奈良市立こども園カリキュラム』について、次の点に関して十分な理解を示すことが、求められる。

- ① カリキュラムの特徴、構成、理念、内容について、その意味するところを十分に理解している。
- ② カリキュラムにおける幼児期の教育の位置付けと必要性について、発達の観点と教育的意義から十分に理解している。
- ③ 上記①及び②に関して、実践に照らした理解と、実践への活用の在り方の理解を有し、実践に照らして解説することができる。

(2) 実践上の課題に応じて指導・助言する能力

実践上の課題に対しては、指導計画の作成から実施、評価に至るまで、下記の諸点を踏まえて、実態に応じて複合的・輻輳的に指導・助言することが求められる。

- ① 実践者の実践上の課題について、実践者個人と、学年と、園のそれぞれの次元から勘案している。
- ② 実践者の熟達を見極め、短期的・長期的な課題を把握している。
- ③ 実践者の作成する指導計画について、年齢や期、子どもの状態を反映しているか、また、各項目の記述は適切かつ簡潔であるか、などについて把握している。
- ④ 実践について、指導計画と整合しているか、保育の展開に応じて柔軟な援助や環境構成が実施されているか、などについて把握している。
- ⑤ 実践者による保育の記録と評価について、指導計画に対応しているか、具体的事実を踏まえているか、十分な省察が行われているか、改善への方策が見いだされているか、などについて把握している。

(3) 保育者の資質・能力を高める研修を企画・運営する能力

園内研修や合同研修（公開保育を含む）は、保育者の資質・能力を高めるのに有効な機会であり、幼児教育アドバイザーには研修の場を活用して、適切で効果のある指導・助言を行うことが期待される。下記の点において、研修参加者自身の課題を捉え、研修を企画・運営する能力が求められる。

- ① 時宜に応じた教育や保育の課題や、保育者自身の課題など、各種のニーズや課題に応じてテーマを掲げ、進行や人員配置などの計画を立てる。
- ② 参加者の経験を踏まえ、学びの在りようを勘案して、計画を立てる。
- ③ 研修の実施の際は、参加者の経験や課題、参加の目的に応じて、進行や展開を工夫する。
- ④ 研修の実施の際は、参加者同士の学び合いや相互の啓発を促したり、状況に応じてテーマや問いを絞ったりして、研修を深める工夫をする。
- ⑤ 研修の終了後には、研修を評価し、次の研修に生かすための改善点や参考点を得る。

(4) 実践研究を推進・統括する能力

1年間を通じて、研究実践の遂行を図って統括的役割を果たし、生産的な研究となるように、下記の諸点を踏まえ、適切に助言・指導を行うことが求められる。

- ① 適切なテーマと研究上の問いが立てられているか、把握し、指導や助言を行う。
- ② テーマに即して、適切な方法が採られているか、把握し、指導や助言を行う。
- ③ 上記②に即して適切で十分な記録が採られ、事実が捉えられているか、また、記録に基づき解釈や評価が行われているか、把握し、指導や助言を行う。
- ④ テーマに応じた結果や考察が得られているか、研究の成果は何であるのか、把握し、指導や助言を行う。

2. 幼児教育アドバイザー講習の実施

1) 『奈良市立こども園カリキュラム』に関する専門的知識

講座1 「奈良市立こども園カリキュラム」の全体構成と幼児教育の位置付け

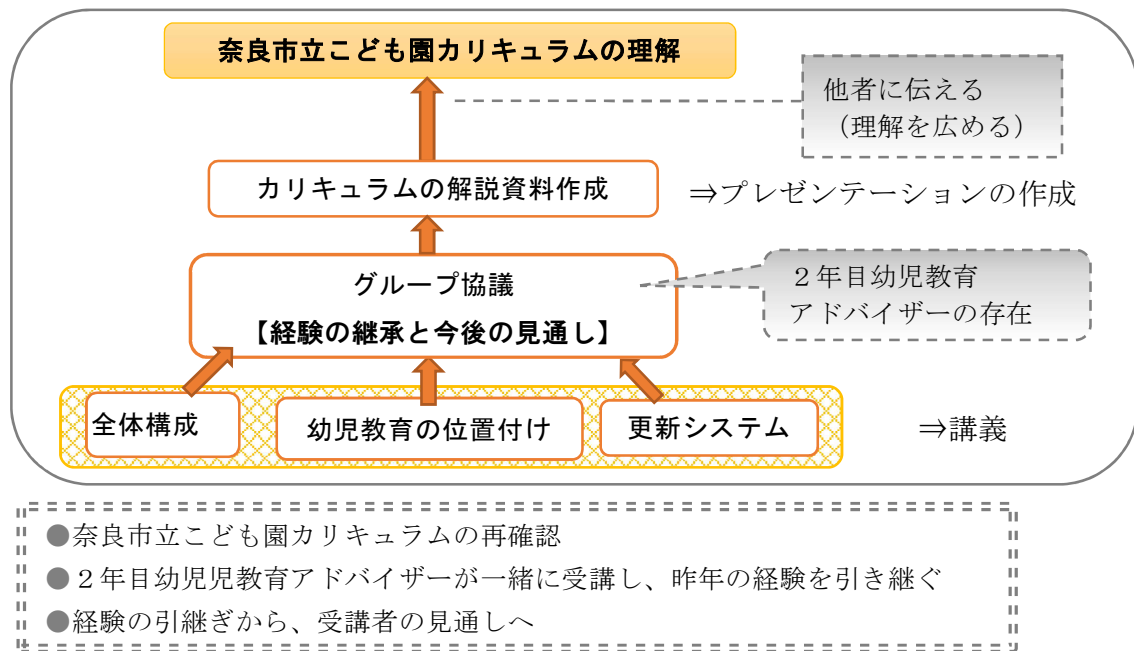
講座2 「奈良市立こども園カリキュラム」の理念と内容

<目的>

- ・「奈良市立こども園カリキュラム」の全体構成と幼児教育の位置づけの理解
- ・カリキュラムも理念と内容について専門的知識の習得

<方法>

- ・講義 ・ワークショップ



<内容>

- ① 「奈良市立こども園カリキュラム」の全体構成と幼児教育の位置づけについて理解する。
- ② カリキュラムの理念と内容について理解する。
- ③ カリキュラム更新システムについて理解する。



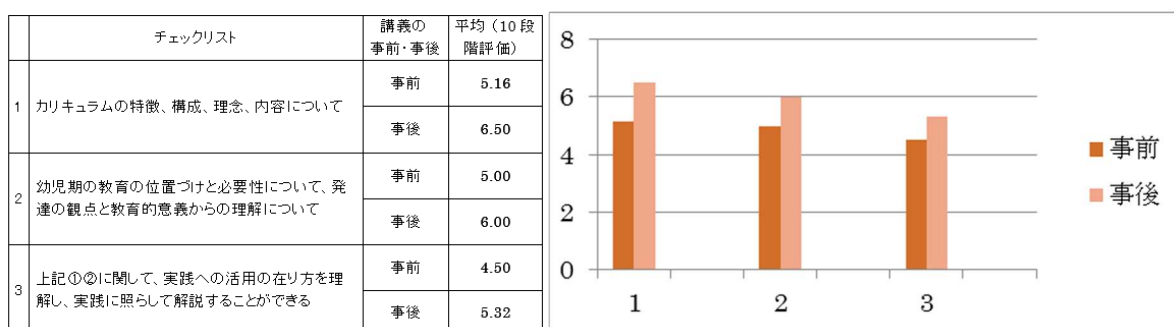
④ グループ協議を行う。

- ・カリキュラムの理念と内容についてどのようなことを学んだか。
- ・幼児教育アドバイザー（2年目）がアドバイザー受講者に対し、幼児教育アドバイザーとして、どのようなことを習得しておかなければならないか理解を深める支援を行う。



(1) 意識調査の実施

講義の事前事後にアドバイザー受講生8名と2年目幼児教育アドバイザー4名にアンケートを取り、自身の心境について調査を行った。



アンケート結果から、アドバイザー受講者は、講義後カリキュラムに対する理解が高まったことが分かる。このことから、本市のカリキュラムは、解説があるとより理解しやすいということが見えてきた。そこで、「奈良市立こども園カリキュラム」の解説版（H27年度版）をさらに解説されていない項目を含めてプレゼンテーションを作成し、活用できるようにすることを計画した。

(2) 講義終了後のアンケート調査

① カリキュラムの特徴、構成、理念、内容について

<分かったこと> カリキュラムについて理解を深める

- 講義やグループ討議から、カリキュラムの特徴や生かし方などが分かった。
- カリキュラム、事例の意義、事例は保育のふり返りだけではなく、カリキュラムの共有、検討にもつながる。
- 幼児期の長時間保育のカリキュラムについて理解を深めることができた。
- このカリキュラムは、小学校教育の接続について連続性を自他にとらえやすくするプログラムであると感じた。
- カリキュラムの構成や特徴や良さについて再確認できた。
- カリキュラムの読み解きを人に伝えられるようにする。
- カリキュラムは子どもの育ちを継続して見ていくものとして読み解いていくこと。

<課題> カリキュラム理解について見えてきた自己課題

- ◇今まで何度か同じような講義を受けてきたが、いかに理解できていなかったかが分かった。
- ◇コンセプトについて理解できていないので、説明ができるようにこれから学びたい。
- ◇自分に実践経験が乏しいのもあるが、コンセプトがやはり難しい。
- ◇まだまだ頭に入りきっていない。
- ◇第Ⅱ部以降は目を通す機会が多いが、肝心の第Ⅰ部を熟知しできていない。

講義を受けてカリキュラムについての理解が深まった、その特徴や良さを再確認したといった感想を持つ一方で、理解が不十分であるといった課題も見えてきた。そこで、これらの不安や課題を解消するために、昨年度の幼児教育アドバイザーが作成した「カリキュラムの解説(プレゼンテーション)」を見ながら、自身も作成し、理解した内容を人に伝え、理解を深めていく研修を進めることとした。

② 幼児期の教育の位置付けと必要性について、発達の観点と教育的意義からの理解について
<分かったこと> **発達の連続性についての気付き**

- 乳幼児期の経験が子供の育ちに大きく影響する。生活、経験、発達の連続性について分かった。
- 『『生きぬく』子ども』の育成が18歳までつながっていくということ。
- 小学校以降の子供の姿につなげて見ていくことができる、3つのコンセプトの良さに気付いた。
- 5歳児に卒園までにどんな力を付けさせたいかを実践者がしっかりと考えて実践を行っていくことが大切であることが分かった。

<課題> **分かりやすさと伝えるために何ができるか**

- ◇小学校への接続、必要な経験の保障を考えながら取り組みたい。
- ◇0～5歳児まで5領域は活動内容なので「〇〇な力を育てる」という柱がある方がつないでいきやすい。
- ◇教育と養護の連続性をどのようにしていけばよいか。
- ◇背景の違う子供達を「生活、発達、経験」と絡めながら、どうつなげていけばよいか。

講義を通して、幼児教育の必要性とその重要性について理解を深めるとともに、その内容をどのように実践者に伝え広めていけばよいかといった課題も生まれた。

③ (2)－①②の実践への活用の在り方の理解と実践に照らした解説の実施について
<分かったこと> **自分たちにできること**

- カリキュラムの理念と、コンセプトを立てた理由について分かった。
- グループでの話し合いを通して、実践と理論をつなげる大切さが分かった。
- 子供が「こうなりたい」という思いを受け止め、そのために行う実践者の役割について明確に意図を持つておくことが大切であると分かった。
- カリキュラムと実践を結び付けて具体的に指導することで理解が深まる。

<課題> **不安と課題**

- ◇事例や指導案においてどう読み解いていくのか。
- ◇3つのコンセプトを事例に照らし合わせた時いつも悩む。
- ◇自分が理解できていないところを明確にし、学ばなければいけないところをしっかりと読み解くことが必要である。
- ◇どのようなタイミングで、どのような人数で、どのような言い方で伝えるとよいか、今後考えながら実践していきたい。

講義を受けたことで、カリキュラムの構成等、理論は理解できたが、実践でどれだけ生かせるか、伝えていけるかといった不安を感じていることが分かる。

このことから、アドバイザー受講者にとって、カリキュラムを基に、実践で指導助言を行うことが課題となっていることが分かる。そこで、アドバイザー受講者の所属園に行政職スーパーバイザーが巡回し、教育・保育についてアドバイスをを行い、共に考えることで、実践への指導・助言力を高めていく計画を新たに位置付けた。

④ カリキュラムを活用した指導助言の在り方についてどのような力をつけたいか

- 実践上の課題に応じて、指導・助言する力を付けたい。それにはまず、カリキュラムの理念と内容についての理解を深める。
- カリキュラムの理解と保育・教育、指導計画への助言や適切な指導を適切な場でできる力を付けていきたい。
- 実践とカリキュラムの内容を関連付けて、指導・助言をしていく力を付けたい。
- 全体や先を見通せるように努力したい。
- カリキュラムをしっかりと読み解き、人に伝えられるようにする。園内で研修するときにテーマを持って進めていく。
- カリキュラムの意味を理解できるように努力し、実践現場や研修の場で、効果のある指導助言ができるようにしていく。
- 分かりやすい指導の仕方、カリキュラムの解説力・指導力を身に付けたい。
- 実践の楽しさを語る人になりたいと思う。
- 2年目になったので、目の前にある指導だけでなく先を見据えた指導ができるようにしたい。
- 園の教育の資質向上に向けて、園内研修の在り方の工夫や、日々の保育の中での、指導・助言の在り方について。(経験年数の違う先生方にもどのように指導したらよいか)

上記のように、アドバイザー受講者自身も自己の資質を向上させたいという強い思いをもち、具体的にどのようにしていきたいかを述べている。アドバイザー受講者の思いには、受講者自身の学び(「カリキュラム理解」「実践とカリキュラムを関連づけた指導の在り方」など)、実践者(他者)の育成(「分かりやすい指導助言」など)、園全体の向上(「園の教育力の向上」など)など、幼児教育アドバイザーとして、自らの学びを広げ、伝えることで、実践者個人だけではなく、組織的な保育力の向上を図りたいという目標が掲げられていた。また、「効果のある指導助言」「先を見据えた指導」「実践上の課題に応じて」といった“実践に生かせる能力”を身に付けたいといった目標も挙げられている。

以上より、幼児教育アドバイザーとしての実践力を向上させる一つの方策として、作成したカリキュラムの解説用プレゼンテーションを用いて、アドバイザー受講者の所属園で教員等に説明する研修を計画した。また、この研修には行政職スーパーバイザーを派遣することとした。

2) 国の動向を見据えた奈良市の教育・保育のカリキュラム・マネジメント

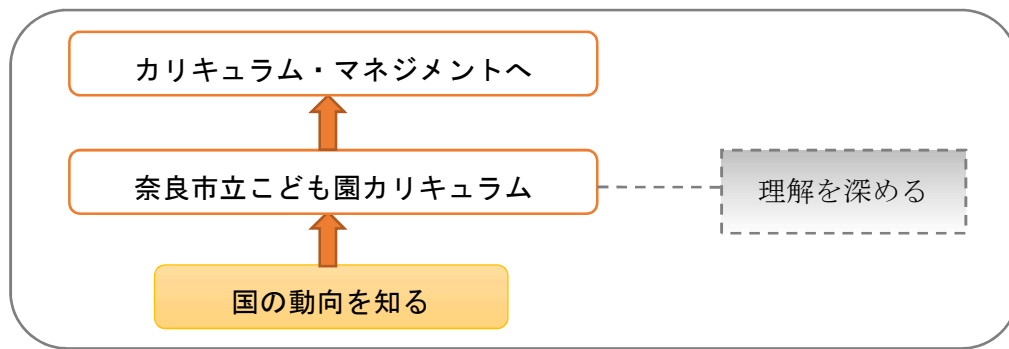
講座3 『幼稚園教育要領改訂に向けて』内容の理解

<目的>

- ・幼稚園教育要領改訂の動向を把握する。(不易と流行)
- ・改訂動向を踏まえ、「奈良市立こども園カリキュラム」について理解を深める。

<方法>

- ・講義 ・ワークショップ
- ・奈良市立こども園カリキュラム解説版プレゼンテーションの作成



- 国の動向を踏まえて奈良市の実践の質を高める
- 自分の学びを他者へ伝えるためにできること

<内容>

幼稚園教育要領改訂の動向を把握する

- ① 講義「幼稚園教育要領の改訂について」
 - 学習指導要領等の改訂のポイント
 - 育成すべき資質・能力の三つの柱
 - 学習・指導の改善・充実とアクティブ・ラーニング
 - カリキュラム・マネジメントの充実
 - 幼稚園教育要領改訂のポイント
 - 小学校教育と接続の在り方：「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

② グループ協議

➤ 幼稚園教育要領改訂に向けた方向性についてどのように理解したか

<三つの柱について>

- 変わらないことは環境を通して行うこと、遊びを通しての総合的な指導を今後も大切にしていけることが分かった。
- 今まで大事に考えてきた心情・意欲・態度を育てることが大切であること、また、理解できる・できないという評価より、心が動くことを大事にしていくのだといくこと。
- 子供の心が動くことや知識技能を活用する力を身に付けることなど、内面的な育ちを身に付けていくことが必要であると感じた。
- 子供達が知識を学ぶのではなく、知識を使っていく力やどのように生かしていくかという過程が大変重要になっている。

<幼児期の終わりに育ってほしい姿について>

- 5歳児後半の姿が明確化されたことで、評価がしやすくなった。
- 不易と流行があることを理解できた。現在の教育要領の五領域のねらい・内容と、幼児期の終わりまでに育ってほしい10項目の具体的な姿から、幼児教育において育みたい3つの柱が示された。しかし、幼児教育は、環境を通して行う教育であることや遊びを通して総合的な指導を行うことに変わりはないと確信した。
- 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を目標に据えることで、各学年の積み重ねが重要になる。そのためにも、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿をしっかりと丁寧に読み解く力とそれを土台とした実践をしていく実践者の力量がこれまで以上に必要になる。

<幼小接続について>

- 18歳まで柱を一本化するということで、小学校に入園する際に、「教科」にではなく、「教科につながる力」を身に付けるという、より具体的な目標が明確になり、小学校教員にも伝えやすくなった。また、小学校教員に幼児教育につながる過程を理解していただきやすくなった。
- 小学校以降の教育でも共有化されるため、小学校教育との連携がしやすくなる。
- ポップコーンの事例では、小学校の先生方にも説明できるように「こんな発達がある」「こんな学びがある」と明確に記入されていた。保育者のねらいや育てたいこと学ばせたいことなど、意図を明確にしていくことが重要で、分析していく力も付けていく必要がある。『深い学びの過程』『対話的な学びの過程』『主体的な学びの過程』の項目が一本に貫いて明記されたので、校園種間で理解しやすくなった。

<カリキュラム・マネジメントについて>

- 10項目に挙げられた子供を育むためには、子供の姿や地域の実情などを踏まえつつ、教育課程を編成・改善していくが重要である。

▶ 国の動向を奈良市の教育・保育内容に取り入れていくにはどのようなことが必要か

<奈良市のカリキュラムについて>

- 「めざす子どもの姿」の中に、10項目から通してみた姿を記述する。
内容の中の項目について、コンセプトの項目はそのままにして、文章を10項目に整理して記述する。
- 10項目が導入されるにあたり、カリキュラムの「めざす子どもの姿」を、その項目にあてはめながら考えていくべきではないか。
- 各期に「めざす子どもの姿」を記載している所も「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と重なる部分があるので、5歳児5期のめざす子どもの姿と10の姿を対応させる。
- 3歳以上のカリキュラム「めざす子どもの姿」の欄に各期ごとに育ってほしい姿(10の姿)を明記しておくことで、実践者も分かりやすくなるのではないか。
- 「奈良市立こども園カリキュラム」について、内容や解説は、まだまだ勉強不足である。改訂の部分については事例の更新やコンセプトについての理解が深まる解説などができればよいと感じる。
“幼児期の終わりまでに育ってほしい姿“が明らかになっているのでカリキュラム5歳児の、どの部分に対応しているのか検討する。
- 10項目の内容がカリキュラムの「めざす子どもの姿」や、小学校との接続・連携にどのように関連しているか読み解き、盛り込んでいかなければならない。
- 幼児期の終わりまでに育ってほしい10項目を、コンセプトとどのようにすり合わせていくか。
- まず、カリキュラムの「めざす子どもの姿」を見直し、育ってほしい幼児期の具体的な10の姿を意識して入れることが必要ではないか。
奈良市立こども園カリキュラムを作るときも十分考慮されたことだったが、2歳児と3歳児のつなぎの部分の再検討、今までから言われている小学校との滑らかな接続を重要にとらえアプローチカリキュラムの作成、在園時間や保育日数等が異なる多様な園児がいることへの配慮の充実が必要となってくるのではないか。また、教育・保育実践者の連携や情報共有のあり方についてなど検討が必要ではないか。
- 奈良市立こども園カリキュラムの中の文言を、改訂される新しい幼稚園教育要領の文言に置き換えることで、さらに理解が深まっていくのではないかと考えた。

- カリキュラムは改訂しながらよりよいものになると考え、今後は新要領を土台に改訂していかなくてはならない。

「新しい教育要領」と「奈良市立こども園カリキュラム」は幼児教育において、育みたい力という基本のところ異なるので、考える必要がある。理想とする子供像の根本は同じであるが、どういう側面から見るかという点が違うので、今のままでは実践者に戸惑いがでてしまうのではないかと思う。

- 基本的には変わらないと思うが、幼稚園教育要領に合わせて言葉の追加や内容、表現など連動しているか検証していく必要があると思います。

3つの柱や育ってほしい10の姿をどう反映させ、言葉にしていくか。

- 5歳児の5期の「めざす子どもの姿」に幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を記入することで、新しい幼稚園教育要領との相互性が出てくるのではないか。カリキュラムなどが、新たな幼稚園教育要領と連動しているのか検証していく必要があるのではないか。

<新教育要領の理解を深めるためにできること>

- 3歳1期から5歳児5期までの育ちが分かるように、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の表を作成する。
- 学習指導要領へとつながる3つの柱について、明記していく。
- 実践事例の様式にも、教育要領に沿っているか照らし合わせたり、振り返ったりできるよう、「10の姿」に合う姿を分析できる項目があってもよいと思う。

改訂動向を踏まえて「奈良市立こども園カリキュラム」の理解を深める

- ① 2年目幼児教育アドバイザーより昨年度作成した奈良市立こども園カリキュラムの解説についてプレゼンテーションを行う。

- ・ 3歳未満児の乳児保育について
- ・ 3歳児以上の幼児期の教育・保育について
- ・ 3歳児以上の長時間保育について

(アドバイザー受講者の感想)

- ・ 各プレゼンテーションを3つ通して聞くことで、より理解が深まった。

- ② 奈良市立こども園カリキュラムには、この3つの項目以外にも、様々な内容が入っている。まだ、作成されていないプレゼンテーションを作成してはどうかなど、2年目幼児教育アドバイザーと共に話し合う。

(アドバイザー受講者の意見)

- ・ 他の職員にもこのような機会を作りたい。

2年目アドバイザーによる説明



グループ協議



実習



カリキュラムの解説用プレゼンテーションの作成

- ① 昨年度幼児教育アドバイザーが作成したカリキュラム解説をもとに、改善点や追加事項がないか話し合い、次の解説版を作成する。

- ・カリキュラムの核となるコンセプトについてももう少し詳細に解説を加える。
- ・乳児保育について、さらにカリキュラム内容に迫った解説の工夫を行う。
- ・まだ解説が行われていない項目を作成する。

(幼小連携・世界遺産学習)

② アドバイザー受講者は、各自、自園あるいは校区内の校園と日程調整等を行い、カリキュラム解説研修の企画・運営を行う。

- ・計画、他校園への依頼、運営、カリキュラム解説、参加者と協議、学びの共有

③ カリキュラム解説作成中のスーパーバイザーによる指導助言

- ・「奈良市立こども園カリキュラム」の解説について、昨年度幼児教育アドバイザーが作成したプレゼンテーションを基に、追加作成したプレゼンテーションを用いて、アドバイザー受講者が自園でカリキュラムの解説を行う。

- ・作成した解説を提出し、行政職アドバイザーがアドバイスをを行い、追加修正を加える。

●奈良市こども園カリキュラムの解説：3歳未満児の保育・幼児期の教育・幼児期の長時間保育・プロジェクト活動・世界遺産学習

行政職スーパーバイザーによる支援訪問

<内容> 園内研修における「カリキュラム解説」の実施

◇スーパーバイザーから見た幼児教育アドバイザーの様子

- ・パワーポイントの映像だけでなく自分が学んだ知識等も織り込んで説明していた。
- ・奈良市のカリキュラムのコンセプト等の説明及び事例研修と合わせ、具体的な説明ができていた。
- ・スーパーバイザーのアドバイスを受け小学校教員にも説明をした。
- ・各園の課題となる点について自園のスライドを入れて具体的に説明し、解りやすかった。

◇スーパーバイズの内容

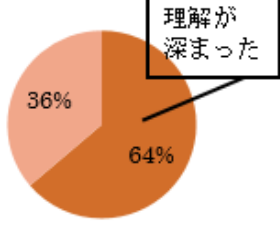
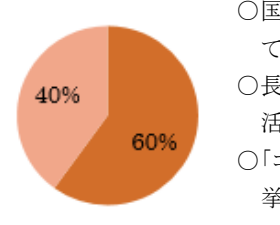
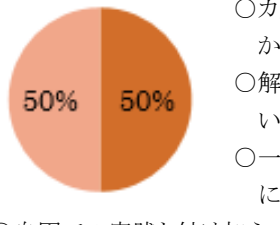
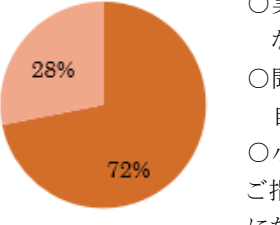
- ・各カリキュラムの中の説明だけでなく、カリキュラムの特徴やコンセプトなど大事にしていることも含めての説明で全体がもっと分かりやすくなることを伝えた。
- ・説明に自園の取り組みを交えて話し、その中で子供の育ちや、子供の興味は何であったかを通して、カリキュラムのコンセプトにつないでいく必要があることを指導した。
- ・自園でのカリキュラム説明のため、実践の振り返りができ、参加者で様々な意見を出すことができるよい機会になった。
- ・実践事例をもとに、具体的な箇所を示し、コンセプトの説明ができていた。

◇今後の課題

- ・幼児教育アドバイザー自身が「奈良市立こども園カリキュラム」の特徴や、教育・保育を通して子供の育ちを深く理解し、実践と結び付けて話したり、指導計画と照らし合わせ説明したり、見直したりして理解できるように解説する。
- ・個々の経験の違いを超えた幼児教育アドバイザーの資質・能力の育成。
- ・3歳未満児保育から幼児期の育ちにどうつなげるのか。
- ・こども園移行に向けた実践内容の充実、保育者の意識変革、保護者へ啓発。
- ・各園で実践について話し合いが持たれているか。
- ・子供の育ちを共通認識し、遊びの展開、環境構成について話し合う場をもつ。
- ・明日へつなぐ実践が日々積み重ねられているか。

実践後の意識調査

・カリキュラム解説用のプレゼンテーションを作成し、「他の職員に伝える」経験をしたことで、カリキュラムについての理解が深まったかどうかについて、アドバイザー受講者に意識調査を行った。

項目	他者へ伝える際の工夫点	アドバイザー受講者の意識調査
<p>・カリキュラムの特徴、構成、理念、内容について</p>	 <p>理解が深まった</p>	<p>○カリキュラムを読んで伝えるだけでなく、どういうことなのか理解できるように、例や解説を交えて伝える。</p> <p>○長時間保育のカリキュラム解説の作成を行ったことで、改めて職員間の連携の大切さを感じた。そのことを強調して説明できるようにした。</p> <p>○パワーポイントでの表記の仕方について、図式や表を出す順番など工夫をして分かりやすくした。</p> <p>○自園の日々の実践に照らし合わせながら読み返した。</p> <p>○担当したカリキュラム解説を何度も読み返し、その場を想定した練習をした。ゆっくり丁寧に読むことを心がけた。しかし、小学校の先生に知らせる機会を持ったので、カリキュラム自体の説明が不十分であった。</p> <p>○経験年数を考慮し具体例を解説の中に取り入れる。</p>
<p>・幼児期の教育の位置付けと必要性について、 ・発達の観点と教育的意義からの理解について</p>		<p>○国の動向など研修で学んだことを参考に取り入れながら伝えて、教育の部分への意識を考えていけるようにする。</p> <p>○長時間保育の特徴である異年齢保育の良さを生かせるように活動内容を工夫し日々の教育・保育に取り組めるようする。</p> <p>○「コンセプト活動」について、子供の変容の様子を具体例を挙げながら話すことで、遊びや生活での学びや意欲的な姿について話をした。</p> <p>○事例報告会の期のまとめを読み返し実践の場面とアドバイスをしている言葉をつなぎ合わせその意味を理解しようと努めた。</p> <p>○子供の姿がカリキュラムの期にそっているか一緒に読み解いていくようにするなど、カリキュラムを参照して話す機会が多くなった。</p>
<p>・上記2つに関して、実践への活用の在り方を理解し、実践に照らして解説することができる</p>		<p>○カリキュラムの内容と実践していることを取り上げ、実践上の姿から見える学びや発達、援助など伝えていく。</p> <p>○解説を行った教員間で、自園の実践に照らし合わせた話し合いを行った。</p> <p>○一方的な解説はできるが、応用がないので、質問には、共に考ようというスタンスになる。</p> <p>○自園での実践も付け加え、具体例と照らし合わせるように工夫した。</p> <p>○自園で子供の姿や、学びを取り入れながら自分の言葉で伝える。</p>
<p>・カリキュラム解説実習を行う際、行政職スーパーバイザーからのアドバイスを受けて</p>		<p>○実践者の理解が深まるように作成することや何度も読み返しながら、実践の具体例を入れて伝える。</p> <p>○聞き手にとって分かりやすい解説の方法を指導していただき自分の課題が明らかとなった。</p> <p>○小学校の先生にも参加していただいたので、スーパーバイザーにご指導いただいたことは安心感につながった。取り組む課題が明確になった。</p> <p>○スーパーバイザーのアドバイスは、よりわかりやすい解説にする為に参考になった。(乳児期の経験が幼児期にどうつながるのか等)</p>

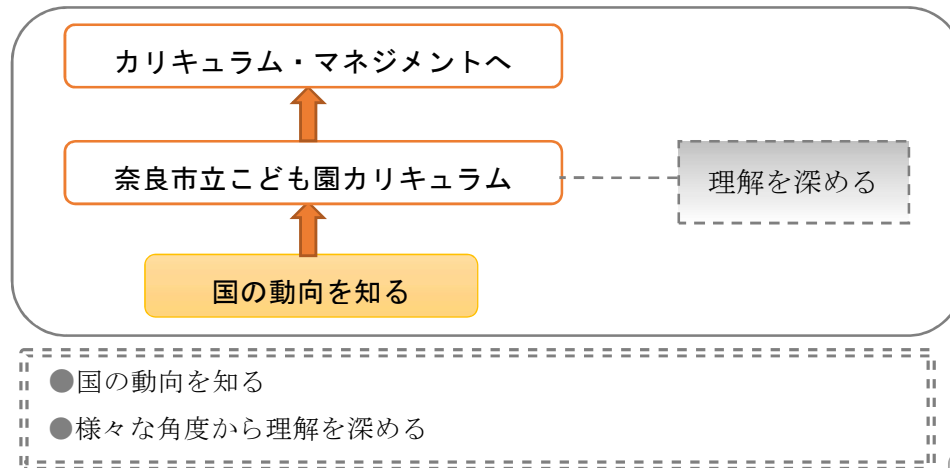
講座4 『保育所保育指針改訂に向けて』内容の理解

<目的>

- ・ 保育所保育指針改訂の動向を把握する。
- ・ 改訂動向を踏まえ、「奈良市立こども園カリキュラム」について理解を深める。

<方法>

- ・ 講義
- ・ ワークショップ



グループ協議

<内容>

- 3歳未満児の保育の充実
- 保育所保育における幼児教育の積極的な位置づけ
- 環境の変化を踏まえた健康及び安全について
- 保護者・家庭・地域と連携した子育て支援
- 職員の資質・専門性の向上
- 保育の質の向上に向けて



- ① 今日の講義を受けて、新しい保育所保育指針の改訂に向けた中間とりまとめの内容をどのように理解できたか。

- 教材研究や記録を書く時間の保障などの項目が記載されたという重要性。
- 職員の研修や資質向上に関する項目も多く、研修の機会の確保や充実などの課題もあることを感じた。
- 3歳未満児の教育（学びの芽生え）が生涯の学びの出発点である事を認識し、「非認知的能力」を育む事が重要である。その為に人的、物的環境について検討・研修を重ね、実践の質の向上を図ることが必要と考える。
- 3歳未満児においても、発達や養護を大切にしながら、「学びの芽生え」や「発達の連続性」を意識するなど、3歳児以降を意識して実践を行うことが大切である。
- 幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針の3歳以上の部分が1本化するということで、とても分かりやすくなる。

保育所保育指針の改定について、中間とりまとめの内容から、乳児期から幼児期へと育ちや学びがつながっていくことをより意識するようになってきていることを学んだ。昨年からの職種一本化を行った本市の状況と併せて、幼児期の教育・保育内容一本化の背景を理解し、そのために何をすべきかについて考えを出し合った。

② 国が示す今後の方向性を鑑みて、「奈良市立こども園カリキュラム」について、変わらない重要なことは何か。また、検討の余地があるとすればそれはどのような点か。

- 0歳～小学校に向けて、1本の柱でつながっていくという理念は重要であり、変わらない部分であると思う。3歳児未満児の実践の中の「健康や安全面」「食育」などの部分を、もっと具体的にカリキュラムの「特色ある活動」に記載するなどしていけば理解につながるのではないかと話し合った。
- 年齢に応じたカリキュラムの内容の見直し、実践がどんどん変化していくので、事例も新しい事例がどんどん出てくる。事例から見えてくる子どもの姿がカリキュラムの姿と合っているのか整合性を見ていく必要がある。
- 検討の余地がある点として、『養護』が総則に記入されるとのことなので、カリキュラム P24-25 に加えるのはどうか。しかし、P24-25 だけに記入してしまうと、日々の振り返りなどでカリキュラムを見る時の参考にしにくくなるのではないか。
 - ・『3つの柱』とコンセプトについての整合性。
 - ・『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』をどこに記入すればよいのか。例えば「5歳児の4期5期のカリキュラム」や「カリキュラムの理念とコンセプト」の次のページなどを見直してはどうか。

本市のカリキュラムの良さや特徴について理解し、これまで取り組んできたことを生かしてできることを考えようという意見の他、具体的にすべきこととして、改訂で示される3つの柱や10項目とカリキュラムのつながりを考えるなど、提案する意欲的な意見も出された。

講座5 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領改訂に向けて』 内容の理解

<目的>

- ・ 幼保連携型認定こども園教育・保育要領改訂の動向を把握する。
- ・ 改訂動向を踏まえ、「奈良市立こども園カリキュラム」について理解を深める。

<方法>

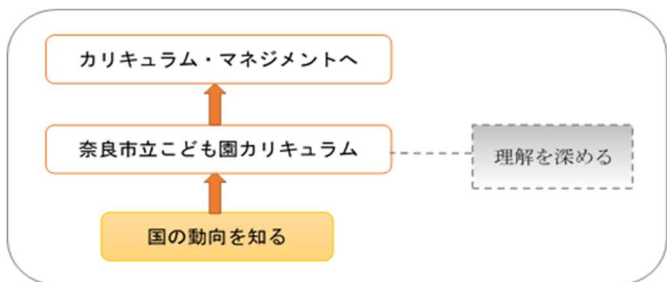
- ・ 講義
- ・ ワークショップ

<内容>

○講義

➤ 改訂の方向性

- ・ 幼児教育において育みたい資質・能力
- ・ 幼稚園等におけるカリキュラム・マネジメント
- ・ 資質・能力の育成に向けた教育内容の改善・充実
- ・ 小学校との接続
- ・ 幼児期にふさわしい評価の在り方
- ・ 学びや指導の充実と教材の充実
- ・ 保育所保育における幼児教育の積極的な位置付け
- ・ 特に配慮すべき事項の充実
- ・ 2歳児から3歳児への移行にあたっての配慮について
- ・ 新たな3歳児の学級をつくっていくための配慮
- ・ 子育て支援にあたっての配慮について
- ・ 地域の保護者に対する子育て支援



講 義



- 改訂の方向性を踏まえた構成の見直し（取りまとめより）
 - ・ 現行の教育・保育要領は、平成27年4月に施行されたばかりであり、基本的構成は維持しつつも、幼稚園教育要領、保育所保育指針の見直しの方向性の整合性を取りつつ、必要な章立ての見直し等を行うこととする。
 - ・ そのなかで、現行の教育・保育要領第1章総則第3幼保連携型認定こども園として特に配慮すべき事項に記載されている「健康及び安全」、「子育ての支援」については、新たに章を立てることが適当である。
 - ・ 幼保連携型認定こども園特有の事項である、「幼保連携型認定こども園として特に配慮すべき事項」については、新たに章立てするのではなく、現行の教育・保育要領同様、総則に載せることが適当である。
- その他の課題
 - ・ 特に支援を要する園児への配慮
 - ・ 研修の重要性・資質向上
 - ・ 周知に向けた取り組み

奈良市の多様性とは何か。3つの柱は、幼児期から小中高まで同じ柱を立てることで、育ちを一本の柱でつなぐことができる。今回の改訂は大きい改訂といえる。

<グループ協議>

案を立てる

- ・ 3つのグループに分かれて、ワークショップ形式で要領・指針の改訂に向けての内容から、今後どのようなことをしていく必要があるかを検討する。



検討内容

Aグループ

【何をするのか】

- ①10項目を十分に理解する。
- ②カリキュラムの「めざす子どもの姿」を分析し、10項目に対応させる。
- ③10項目を理解するためには、奈良市のカリキュラムがどのようにつながっているのかを明らかにして理解を深める。

【課題】

- ・ 何期からするのか。子供の発達と姿は積み重なっている。
- ・ 幼児期から小学校へどうつながっているのか。

Bグループ

【何をするのか】

- ①カリキュラムの「めざす子どもの姿」を分析・検証し、10項目に整理する。
- ②10項目のどこにあてはまるのか明記する。

【気付き】

- ・ カリキュラムに3歳児未満の学びの芽生えについても追記していくことができる。
- ・ カリキュラムは、3つのコンセプトや5領域で記載しているので、10項目をそこへ入れると分かりにくい。ということは、10項目とのつながりが今までは見えにくい。
- ・ 何らかの形で10項目を取り入れなければ、カリキュラムの作成者側は意識できても、読み手側は意識が薄くなる。
- ・ 小学校との接続・連携は、学習指導要領をもと作成している。学習指導要領も改訂されるので、10項目にあてはめながら見直していく。

Cグループ

【何をするのか】

①国が提示している10項目を、どんな形式で表記するのか。

【気付き】

- ・乳児に関しても10項目の姿はすべてつながっているはず。それをどのようにつながっているか見えるようにする。
- ・カリキュラムの5歳児のところ（ ）でそのまま10項目を入れると困惑するかと思うので、どのように入れるか悩む。
- ・「子育て支援については新しい章立てをする」ということで、カリキュラムに新たな項目として必要。カリキュラムの長時間保育（一時預かり）のようなものが子育て支援についても必要。

<講習を通して見えてきたこと>

○ 10項目は小学校につながる姿として出された。だからこそ国の方向性とのつながりが明らかとなるような表記の仕方、奈良市としてどのような子供を育てたいのか、見えるようにする。このことを市外や小学校教諭、その他の関係機関にも分かりやすいものにしていくことで、これまで積み上げてきた奈良市の方針の理解にもつながり、市外への発信にもなる。

また、特に小学校教諭には、同じ柱で明確化したカリキュラムを用いることで、多くの説明をしなくてもそれらを通して幼児教育の理解をすることができ、このことが今後の幼小接続の強化につながると考える。

○ 国が進める方向性を見越してカリキュラムを作成してきたので、これまでやってきたことを基盤に、大事にしてきたことを生かし、更にどんな力をつけたいのか、幼児期の終わりまでに育ててほしい姿をより確かなものにするために、誰が見ても分かるカリキュラムを作成していく必要がある。

<次回の講習に向けて>

これまでの3回の講習から国の動向を理解し、改訂を本市のカリキュラムにどのように反映させていくかについて協議が進められた。3グループとも「10の姿」を奈良市のカリキュラムにいかにか反映させるかについて、協議を深めた。グループ協議を重ねる中で、受講者がカリキュラム・マネジメントに取組み始めたといえる。このように受講者が、講習を通して、新たな情報を取り入れ、教育・保育の資の向上に向けて、手立てを見出していく力を習得してきたことが分かる。

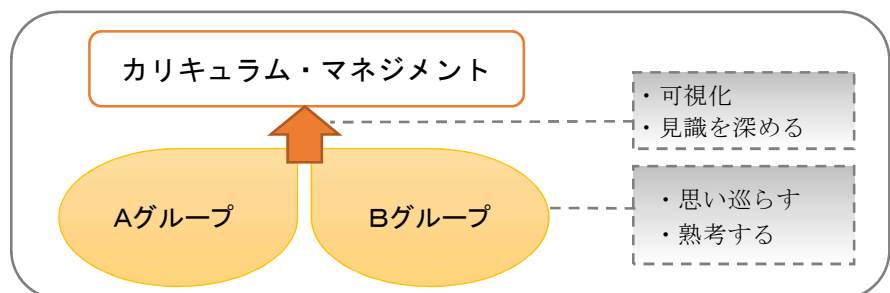
講座6『奈良市立こども園カリキュラム』とカリキュラム・マネジメント①

<目的>

- ・教育要領等の改訂動向を理解し、「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿」と「奈良市立こども園カリキュラム」の3つのコンセプトについて分析し、育てたい子どもの姿を明確化し、共通理解を図る。
- ・今後の奈良市の幼児教育・保育の方向性を検討する。

<方法>

- ・演習
- ・ワークショップ型研修



- 国と奈良市の状況把握をし、革新的なものを生み出す・新しい価値を見出す力
- リーダーとしての力の発揮と幼児教育アドバイザー同士の協働性

<内容>

① カリキュラムの核となる3つのコンセプトから育てたい子供の姿を可視化する

- ・自分たちのカリキュラムを用いて、要領・改訂の方向性を確認する。
- ・2グループに分かれ、カリキュラムの「3つのコンセプト」をさらに詳細に明記した内容について理解を深め、10項目の内容と特につながっていると思われる項目に色付けをした表を作成する。

② ワークショップを通して議論を深める

カリキュラムのコンセプトは、5領域を横断的に捉え、奈良市がめざす子供像を「経験」の視点から構成したものである。このことから、協議し始めたときは、コンセプトのどの項目にも10項目の内容が入っているという意見が多数出た。しかし、10項目について具体的な育てほしい子供の姿を何度も読み返し、「どんな力をつけたいのか」について協議を進める過程で、「大きく捉えるとつながりがあるのではと思われるが、見る視点を絞ると、当てはまらないものも出てくる」といった捉えの変化が見られた。育てたい姿を具体的な子供の姿からイメージしながら、文言一つ一つを繰り返し見直し、熟考を進めていった。



アドバイザー受講者は、グループワークを通して、目標をもち、達成するための道筋を提示し、組織の中核を担う役割として本市の教育・保育が今後何をめざしていくのかについて議論を深めるようになったといえる。

③ ワークショップ型研修の利点と効果

- 「個性が活きる」「意見の整理」「必要な役割を見出す」「気付きの多様化」
- 「自分とは違う価値観や意見から視野を広げる」「記録の工夫」

○ワークショップの活用と工夫

- ・各6名に分かれて少人数でグループ協議を行った。さらに、ワークショップ形式で意見をまとめやすくする方法を用いたことで、1つのことを深く分析して考えたり、新しい考えが生まれたり、記録を通して自分たちが出し合った考えを明確化する力の育成が可能になった。
- ・意見を出しやすい雰囲気ができ、議論を進めていくうちに、受講者各々の見方が変わり、違う角度から検討できるようになった。その結果、思わぬ発想や意見が生まれた。
- ・少人数で行うことで、グループ全員が理解し、受講者一人一人が主体となって進めることができた。

○中堅層としての力量形成

- ・グループで出された各意見を一つにまとめるために、進行する役割、意見を統括する役割、出てきた意見をまとめ、記録する役割と、グループ内で協議を進めていく上で必要な役割を見出して進めるようになった。グループで協力し、効率的に結論を導き出す力の育成につながった。

○演習の効果

- ・幼児教育と小学校教育との接続を図るための「幼児期の終わりまでに育てほしい姿」の理解が深まった。

カリキュラムの3つのコンセプト

Aグループ

コンセプト1 【判断と行動】自ら考え、判断し、行動する。

子どもが自ら「主体」であると感じることに伴って、生活や遊びや様々な取組において、自分で考え、判断し、行動することを指します。【判断と行動】は、自ら考えて行動すること、自立（主体性、自主性、依存の軽減）、計画性（目標設定と実行、自己管理、自律や自己調整）、問題解決（困難克服、手段の選択、実行と評価）を含みます。子どもが自分の意思に基づいて考え、判断し、行動する過程が主体としての成長であり、主体的な取組につながります。子どもが「思考・判断・行動」その過程にその手ごたえが感じられ、意欲を促すことができます。

【判断と行動】の内容

自立

- 状況に応じて自分はどうするか、自分の意思で考え、判断する。
- 必要に応じて自分から行動し、他者から指示されなくても自分で行動する。
- 他者に影響を及ぼさず、必要に応じて適切な行動をする。

計画性

- 目標を持ち、やりかたを定めながら、行動や取組にあたる。
- 自分なりのペースや進捗を把握し、やりかたを適切に変えていく。
- 自分なりのペースや進捗を把握し、必要に応じて判断し行動する。

問題解決

- 困難を持ち、どのようにすればよいか、めあてを持つ。
- 解決に向けて、どうすればよいか、手段や方法を考える。
- 試行錯誤を繰り返して様々な取組を行い、その適切な方法を評価する。

コンセプト2 【結】<もの><ひと><こと><こと>とかわり、関係を結ぶ。

（もの）（ひと）（こと）といった対象とかわり、子どもが自ら関係を結ぶことを指します。具体的には「対象についての理解」と「対象とのかわり方」「理解とかわり方の変化」を含みます。周囲の様々な環境に自分や好奇心を持って自らかわり、自分と何らかの関係を結び、さらにその関係を更新していくことが期待され、その過程が経験として蓄積されます。

【結】の内容

（もの）との関係性

- 物の性質や仕組み、形状の変化や法則性を理解する。
- 材料選択や操作、加工など、ものとの関わり方を工夫する。

（ひと）との関係性

- 他者の存在を認め、尊重し、他者との関係をよりよくなるようにしていく。
- 役割や協働し、共通の目標に取り組む。
- 役割を理解し、ルールや規範を用いて集団生活を送る。

（こと）との関係性

- 自然現象や文化的現象を理解する。
- 知識や情報を用いて、事象や状況を理解する。
- 自ら物語や生活の世界を構築する。

コンセプト3 【表現と反応】思いや気付きや感じたことを表し、認め合う。

言葉や身体、音楽、造形などによる表現を通して、自分の考えや気付き、感じたことを友達やおとなに伝えたり、周囲からの反応を受け止めたり、他者の表現に適切に反応したりして、コミュニケーションを豊かにしていくことを指します。その過程において、他者と共感し合うことや理解し合うこと、そして、互いの存在や考えを認め合うことを含みます。

【表現と反応】の内容

言葉

- 遊びのために自分の思いを言葉で表し、互いの考えを理解し合う。
- 言葉に対する感傷を思い、状況に応じて言葉を使い分ける。
- 言葉の特性や有効性、機能的側面に気づく。

アート

- 身体表現や音楽の表現、造形や造形などを通して、自分のイメージを表現する。
- アート表現を楽しみ、楽しさや不思議なところを表現する。
- 他者のアート表現に言葉や表情、行為で反応し、その良さを理解する。

情動表現

- 感じたことや内面的状態を、言葉や表情、行為で表現する。
- 自分の情動を言葉や表情、行為から読み取り、理解する。
- 自分の情動を調節し、他者の情動に応じた行動をとる。

※関連していると思われる項目に色付けする

Bグループ

コンセプト1 【判断と行動】自ら考え、判断し、行動する。

子どもが自ら「主体」であると感じることに伴って、生活や遊びや様々な取組において、自分で考え、判断し、行動することを指します。【判断と行動】は、自ら考えて行動すること、自立（主体性、自主性、依存の軽減）、計画性（目標設定と実行、自己管理、自律や自己調整）、問題解決（困難克服、手段の選択、実行と評価）を含みます。子どもが自分の意思に基づいて考え、判断し、行動する過程が主体としての成長であり、主体的な取組につながります。子どもが「思考・判断・行動」その過程にその手ごたえが感じられ、意欲を促すことができます。

【判断と行動】の内容

自立

- 状況に応じて自分はどうするか、自分の意思で考え、判断する。
- 必要に応じて自分から行動し、他者から指示されなくても自分で行動する。
- 他者に影響を及ぼさず、必要に応じて適切な行動をする。

計画性

- 目標を持ち、やりかたを定めながら、行動や取組にあたる。
- 自分なりのペースや進捗を把握し、やりかたを適切に変えていく。
- 自分なりのペースや進捗を把握し、必要に応じて判断し行動する。

問題解決

- 困難を持ち、どのようにすればよいか、めあてを持つ。
- 解決に向けて、どうすればよいか、手段や方法を考える。
- 試行錯誤を繰り返して様々な取組を行い、その適切な方法を評価する。

コンセプト2 【結】<もの><ひと><こと><こと>とかわり、関係を結ぶ。

（もの）（ひと）（こと）といった対象とかわり、子どもが自ら関係を結ぶことを指します。具体的には「対象についての理解」と「対象とのかわり方」「理解とかわり方の変化」を含みます。周囲の様々な環境に自分や好奇心を持って自らかわり、自分と何らかの関係を結び、さらにその関係を更新していくことが期待され、その過程が経験として蓄積されます。

【結】の内容

（もの）との関係性

- 物の性質や仕組み、形状の変化や法則性を理解する。
- 材料選択や操作、加工など、ものとの関わり方を工夫する。

（ひと）との関係性

- 他者の存在を認め、尊重し、他者との関係をよりよくなるようにしていく。
- 役割や協働し、共通の目標に取り組む。
- 役割を理解し、ルールや規範を用いて集団生活を送る。

（こと）との関係性

- 自然現象や文化的現象を理解する。
- 知識や情報を用いて、事象や状況を理解する。
- 自ら物語や生活の世界を構築する。

コンセプト3 【表現と反応】思いや気付きや感じたことを表し、認め合う。

言葉や身体、音楽、造形などによる表現を通して、自分の考えや気付き、感じたことを友達やおとなに伝えたり、周囲からの反応を受け止めたり、他者の表現に適切に反応したりして、コミュニケーションを豊かにしていくことを指します。その過程において、他者と共感し合うことや理解し合うこと、そして、互いの存在や考えを認め合うことを含みます。

【表現と反応】の内容

言葉

- 遊びのために自分の思いを言葉で表し、互いの考えを理解し合う。
- 言葉に対する感傷を思い、状況に応じて言葉を使い分ける。
- 言葉の特性や有効性、機能的側面に気づく。

アート

- 身体表現や音楽の表現、造形や造形などを通して、自分のイメージを表現する。
- アート表現を楽しみ、楽しさや不思議なところを表現する。
- 他者のアート表現に言葉や表情、行為で反応し、その良さを理解する。

情動表現

- 感じたことや内面的状態を、言葉や表情、行為で表現する。
- 自分の情動を言葉や表情、行為から読み取り、理解する。
- 自分の情動を調節し、他者の情動に応じた行動をとる。

※関連していると思われる項目に色付けする

＜次回の講習に向けて＞

・今回のワークショップの結果から、さらに5歳児5期までに育ってほしい姿についても検討する。

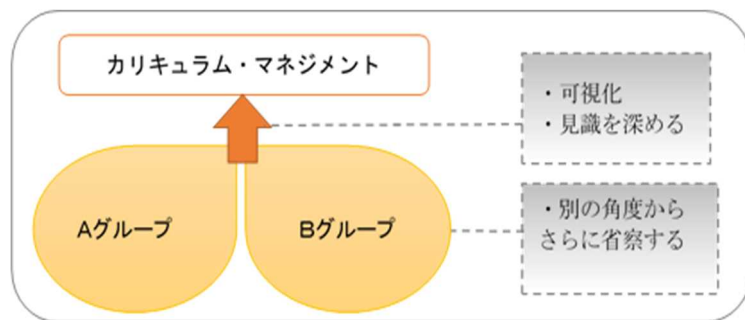
講座7 『奈良市立こども園カリキュラム』とカリキュラム・マネジメント②

<目的>

- ・教育要領等の改訂の動向を理解し、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と「奈良市立こども園カリキュラム」の5歳児5期について分析し、育てたい子供の姿を明確化して、共通理解を図る。

<方法>

- ・演習 ・ワークショップ型研修



●自分の意見を出して、議論を深める力

●自分たちの考えを形に表現しながら、さらに課題の整理と解決する力

●論議を深め、物事を省察する力

<内容>

○グループ協議

- ・カリキュラム5歳児5期（様式に挙げた項目）と照らし合わせて、10項目ごとのシートを作成し、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について理解を深める。

○グループ報告

<演習2>

- 2グループに分かれて協議を進めたことで、グループによって分析方法、気づき、疑問、その解決方法も異なった。交流によって多様な手法を学ぶことができた。

Aグループ 10項目の「小項目」に挙げられた子供の姿について、今後追加していくとよいのではないかとと思われる項目を番号で書き表した。協議では、具体的な子供の姿をイメージして確認し合う様子が見られた。同じ文言でも捉え方の相違があることが分かり、育てたい子供の姿を共通理解することにつながった。

Bグループ カリキュラム5期の文言と10の姿のつながりが見て捉えやすいように、上記の表のとおり色付けをしてまとめた。関係性が深いものには濃い色を、やや関係しているものに薄い色を付けた。

【横軸】関連性が弱い項目は追加が必要

【縦軸】左側の項目は多く関連していたが、社会生活との関わりなど、関連性が弱い項目がある

5歳児後半のめざす子供の育ちとして何が必要かについても協議した。

3) 実践の指導：実践者・実践園への指導・助言

講座 8 実践者・実践園への指導助言の要点

<目的>

- ・教育・保育の実践に関する実践者・実践園に対する指導・助言の技術を向上させる。
- ・実践者自身が実践への見方や考え方を自覚し、課題を明確化して、改善の糸口を得るために、幼児教育アドバイザーが行うべき指導・助言を、その根拠と共に伝える技術の点から考え、実行できるようにする。

<方法>

- ・講義 ・ワークショップ形式

●子供の姿から、学びを見取る力と見通し

<内容>

- ◎2年目幼児教育アドバイザーが、アドバイザー受講者に昨年度講習で学んだことや、自園で実践している園内研修の取組について説明する。
 - 研修を計画・実施する際のポイントと効果
 - 実践を通した実践者・参観者の学び
 - 指導・助言に向けての実践把握→指導・助言の根拠
 - 指導・助言の内容をまとめる→伝える技術
 - 実践上の課題に応じて指導・助言する力
- ◎上記の内容について説明を受けた後、以下のようにワークショップを行った。
 - ビデオ映像の視聴
 - ビデオ視聴を通して保育実践の見取りを記録し、グループ協議を行う。
 - ①ビデオ視聴後、受講者は自分なりの実践の見取りをワークシート1に記録する。
 - ②3グループに分かれ、実践の見取りについて意見交換を行い、実践者の援助・環境構成はどうであったか、別の選択肢や解釈の有無について意見をまとめ、グループごとに報告する。
 - 学識経験者より実践指導についての講評

Work 1

次の視点をメモしながら、ビデオを視聴しましょう。(子どもの様子、保育者の援助、環境構成)

①事 実	②評 価	③別の選択肢や解釈
・時間の経過に沿って記述する。 ・誰にとっての事実であるか、把握する。	a)円滑、停滞 b)工夫 c)課題 d)意図の推測	・自分ならどうするか。(なぜか) ・別の対応や解釈はあるか。

Work 2

Work 1を踏まえて、指導や助言の内容を具体的に書きましょう。

ポイント ・内容を構造化する。(内容を絞る、統一された課題やテーマをまとめる)
 ・順序立てて、話を組み立てる。

格 評	
1	ポイ ント <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> 具 体 的 内 容
2	ポイ ント <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> 具 体 的 内 容

＜ アンケート調査より ―指導・助言を行う上での学びや気付き― ＞

- ポイントを絞って課題を提示すること。
 - ・実践の事実を捉える
 - ・課題に応じて指導助言を行う要点を見つける
 - ・指導助言の内容をまとめる
 - ・伝える技術の習得
 - ・年齢に即した実践内容か
 - ・適切な言葉がけをしていたか
 - ・教材などの環境の工夫がなされていたかなど、始めに見取るポイントを明確にし、最後に総評を伝えることで、聞き手も見通しを持って指導を受けることができる。また、論点が明確化され、学びが深まる。
- 実践者の経験年数や段階を理解した上で、熟達度に合った指導をする。
- 「なぜ」「どうして」「ここが知りたい」と疑問を引き出し、話し合いの糸口を見つけて議論していくことが大切だと感じた。
- 実践者と一緒に考えつくっていく、学び合うという姿勢が大切。研修を実施する上で、意見を出しやすい雰囲気をつくることを心掛け、互いの意見を認め合うようにする。良い点から取り上げ、良さや課題に対する改善点を記録に残し、振り返る。
- 課題について否定ではなく、違うやり方、考えに気付き、参加者で共有する。
- 指導、助言を行う時、「相手から聞く」「疑問を持つ」視点が大事であること。
- ねらいと実践が対応しているか見極める能力。
- 期に照らし合わせた子供の姿であるか見極める能力。
- 助言者は、実践者の意図を推察したり、他の参観者の意見を聞いたり助言者自身が多面的にとらえる力量が必要である。

＜ アンケート調査より ―指導・助言を行う上での課題― ＞

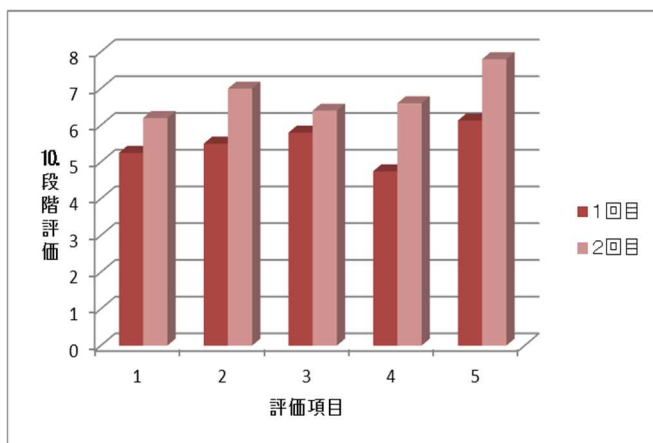
- いろいろな見方、考え方があることを認めた上で、事実をとらえ実践上の問題を明確にし、いくつかの方法、対応、対案を考えていくこと。
- 子供の姿から期に応じた姿や育ちがあるか、その後どのような実践をしていけば良いのかなど、次の指導案につなげて考えていくこと。
- カリキュラムをしっかりと読み、自分なりに理解することと、話し方の工夫。
- 自園の職員とは、ある程度信頼関係が築けていて、普段の実践の様子も見え、課題も把握しやすいが、それを他園の職員に伝えるとなると、非常に難しいと感じた。

＜ アンケート調査より ―課題の改善点― ＞

- 改善の糸口や明日につながる話し合いとなるよう配慮する。
- 実践を見る力、子供の行動を読み取り、ねらいや発達の中の部分なのか把握し、焦点をしぼり指導・助言したい。
- 指導案とカリキュラムを照らし合わせて読み解くこと。
- 実践者の思いを汲んだり、他の参観者の意見を取入れながら、指導計画に照らしていく。また、分かりやすい話し方、良い点を見つけることを意識する。
- ビデオ視聴をしたことで、自分とは違う見方について知ることができたので、園内研修でもいろいろな意見を出し合うことが必要だと感じた。
- 「奈良市立こども園カリキュラム」の解説を参考にしながら、読み合わせをする。

<評価項目>

①	②	③	④	⑤
ビデオ映像の視聴をし、実践における事実や課題の明確化・焦点化ができましたか	指導・助言の方法や伝え方について気づきや学びがありましたか	年齢や発達の時期に応じたよりよい教育・保育のあり方を探ることができましたか	指導・助言技能向上につながったと感じることができましたか	幼児教育アドバイザーの解説を聞き、アドバイス等を受けることでアドバイザー講習を受ける際の安心感や理解度の向上に十分つながりましたか



<講座受講後と実践後の比較>

左記のグラフから、講義を受けて指導助言についての知識を得た後に、実践の場で実際に経験することで、必要な資質・能力が身に付くとアドバイザー受講者が実感していることがうかがえる。

これらの取組をPDCAサイクルで機能させるためにも、実践現場でのサポートを行いながら、受講者が経験を積み重ねていける研修体制が必要であることが分かる。

講座9 実践者・実践園への指導助言の実際

<目的>

- ・教育・保育の実践に関する実践者・実践園に対する指導・助言の技術を向上させる。
- ・実践者自身が実践への見方や考え方を自覚し、課題を明確化して、改善の糸口を得るために、幼児教育アドバイザーが行うべき指導・助言を、その根拠と共に伝える技術の点から考え、実行できるようにする。

<方法>

- ・実践事例の読み解きと添削 ・自園の実践者への指導助言

- 子どもの姿から、学びを見取る力と見通しをもつ
- 事例作成者や他園の職員と意見交換をしながら学びを広げる

<内容>

①「事例研修会」での活動実習

事例研修会までの各園での研修

○継続的な実践記録の作成

- ・奈良市立公立園の担任が各年齢の1期～5期に渡って実践事例を作成する。



○園内研修の実施

- ・各園で作成した各年齢の実践事例を基に園内研修を行い、1事例を選出する。



○他園の事例を含めた園内研修の実施

- ・各園で選出し、提出した事例をブロックごとにまとめ、さらに園内研修を行いブロック内から1事例を選出する。



事例研修会当日

- ・年間4回の事例研修会にアドバイザー受講者・スーパーバイザーが2回ずつ参加する。
- 事例研修会
 - ・全園の代表者が研修に参加し、グループ協議を行う。
 - ・自園で選出したブロックごとの実践事例から1事例を選出し、その事例を基にワークショップ形式でグループ協議を行い、読み解きを行う。
 - ・グループ報告をする。



事例研修後の各期担当係と事例作成者の取組

- グループ協議で記録した事例の読み解きを、グループの代表副園長が「当初版」として記録の作成を行う。



○実践事例「完成版①」の作成

- ・その読み解きを受けて、事例作成者が再度見直し、事例の修正を行う。



その後の幼児教育アドバイザー・スーパーバイザーの役割

- 「完成版①」のアドバイザー受講者による添削



幼児教育アドバイザー講習を生かした事例の読み解き

- 「完成版①」の添削を行ったものをスーパーバイザーがさらに見直し、アドバイザー受講者にアドバイスをを行う。



読み解きと幼児教育アドバイザー添削を参考にして作成者が書き直しを行った【完成版】

実践事例読み解き【当初版】

実践版

○スーパーバイザーから指導助言をもらったことを受け、アドバイザー受講者が再度添削の見直しを行う。

スーパーバイザー（園長）からのアドバイス

○2度の添削を行った「完成版①」を作成者に戻す

- ・単クラス、小規模化した園も多く、他園の職員にも事例についてアドバイスを受け、自身の実践力向上につなげることを目的とする。

○実践事例「完成版②」の作成

- ・幼児教育アドバイザーの添削を基に、事例作成者が再度事例の修正を行い、「完成版②」を作成する。

事例研修部会に「完成版②」を戻し、事例選出

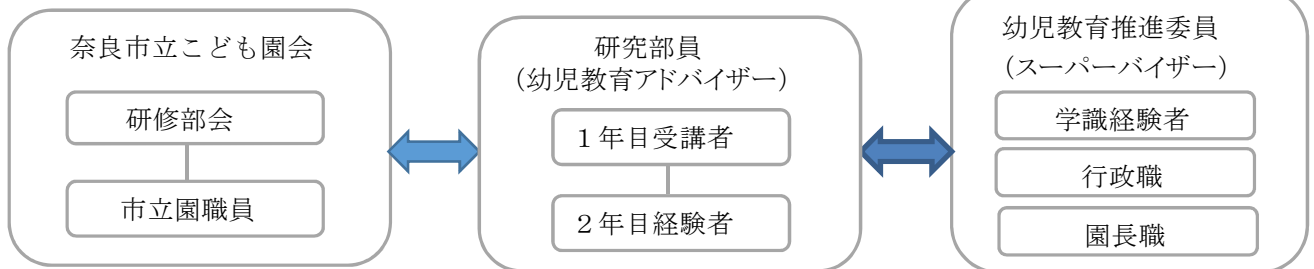
○事例研修部会部長（園長）とスーパーバイザーにより、「完成版②」の8事例から3事例を選出する。

幼児教育アドバイザーの企画・運営・報告による「実践事例報告会」の実施

○実践事例報告会で報告

- ・上記の方法で期ごとに3事例ずつ選出された事例の中から、さらに1期ごとに1事例を選出し、「当初版」と「完成版②」について幼児教育アドバイザー受講者と事例作成者が報告する。

幼児教育アドバイザー講習による研修の企画運営と報告



②事例研修会「実践事例報告会」

開催日時：平成29年1月12日（木）

14時45分～17時00分

参加対象：スーパーバイザー

アドバイザー受講者

公立こども園・幼稚園・保育園職員

参加人数：115名

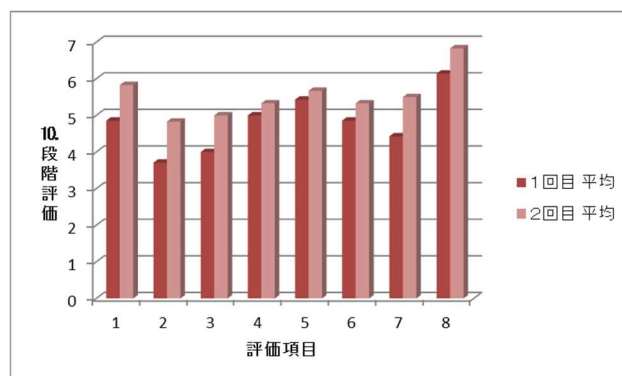


日程表

平成28年度 事例研修部会「実践事例報告会」				
			日時：平成29年1月12日（木） 場所：東人職文化センター	
本日の日程				
14:30～ 受付				
14:45 開会挨拶（こども園会 園長より） 今年度の事例研修会について				
15:00 事例報告 招待者・・・幼児教育アドバイザー 完成版・・・実践事例作成者				
期	時 刻	対象年齢・実践事例名	園名・作成者	幼児教育アドバイザー
1期	15:00～	3歳児 「だんだん 寝ちゃった」	都築こども園 園長 洋美	高尾 美咲 尾花 悠紀
2期	15:15～	4歳児 「ダンゴムシは何を食べるの」	女宮こども園 河井 恵子	南井 弘巳 上野 真智子
3期	15:30～	0歳児 「もこ もこもこ」	京西保育園 前田 美穂	横田 麻子 魚住 早代子
4期	15:45～	5歳児 「どのくらい重いかな」	神宮幼稚園 河本 彩	小塚 高子 松田 明子
16:00 挨拶・助言 講師：奈良女子大学 准教授 本山 为子氏				
16:50 閉会挨拶（こども園推進課より）				
17:00 閉会				

◎各研修のアドバイザー受講者による事後アンケート調査

	評価項目
①	奈良市立こども園カリキュラムの基づいて話し合えた
②	実践における問題の明確化・焦点化ができた
③	実践事例の読み解きをするにあたって協議内容の焦点化を図ることができた
④	年齢に応じた発達の特徴やかかわりの視点で話し合えた
⑤	指導・助言の方法や伝え方について気づきや学びがあった
⑥	他園の職員とともによりよい教育・保育のあり方を探ることができた
⑦	専門性の向上につながったと感じる
⑧	幼児教育アドバイザーの役割や必要性を感じた



実践開始初回に比べて、2回目の実践では、各項目の全てについて意識して取り組んでいることが分かる。また、実践経験が技能習得につながっていることをアドバイザー受講者自身も実感していることが分かる。

<事例研修会での幼児教育アドバイザーによる取組について>

—奈良市立こども園カリキュラムに基づいて意識して話し合ったこと—

- 対象年齢と期の姿を意識するように、カリキュラムの内容と照らし合わせた。
- カリキュラムを参考にし、重なる姿や似通った記述の仕方などにも触れながら進めて行った。
- 事例の中で疑問に感じたこと、気付いたことについて出し合う。
- コンセプトの記述について、足りない部分があるのではないかという意見が出てきたので、どのようなコンセプトを入れていったらよいか考えを出し合う。
- 事例の内容が、この時期の幼児に合った援助や環境構成ができていたか。
- ねらいが子供の発達や年齢に合っているのか、環境構成や援助がどうだったのか、他の方法なら子供たちは、どうだったのかを話し合う。
- 幼児の活動の様子について、気が付いたことや疑問点などを出し合い、分かりやすく表記していくにはどのように書けばよいか意見を出し合う。
- 援助や環境構成について、そのことがなされているが表記されていなかったり、実践者の意図をより伝わりやすくしたりするにはどのように書いていくか。

—実践事例について議論を深め、読み解きが深められるようにするポイント—

- 参加者（読み解きをする側）と、事例作成者の考えを聞き、グループの参加者は、それらをどのように受け止めたかについても意見を出し合う。
- 発達の姿にあっているのか、ねらいに即した姿が表れているかについて検討する。
- 参加者の意見の中で重要なポイントを簡潔に記述し、視覚的に意識できるようにした。そのことで、協議のポイントが絞れた。
- 意見が出にくくなったら、事例の中で「自分だったら・・・？」という問いかけをするようにした。
- 時間配分も念頭におき、幼児の姿、事例の特徴、コンセプト、評価と、すべての項目が最後まで話し合えるようにした。

- 時間は短いですが、どの事例を選ぶかについて協議することで、その後の読み解きがしやすかった。
- 気付いたこと、感じたことなどを参加者一人一人が発言できるようにする。
選んだ事例の作成者がグループ内にいるので、事例について議論を深めることができる。

ポイント

- ・話しやすい雰囲気づくり
- ・意見が出なくなったときの対応策
- ・時間配分を考え、見通しを持って進行する
- ・ポストイットを利用して、意見の共通理解を視覚的に有効にする
- ・グループの状況に応じて臨機応変に対応できる柔軟性をもつ
- ・短時間にたくさん意見が出し合えるポストイットの有効活用

— 幼児教育アドバイザーの役割として必要と感じたこと —

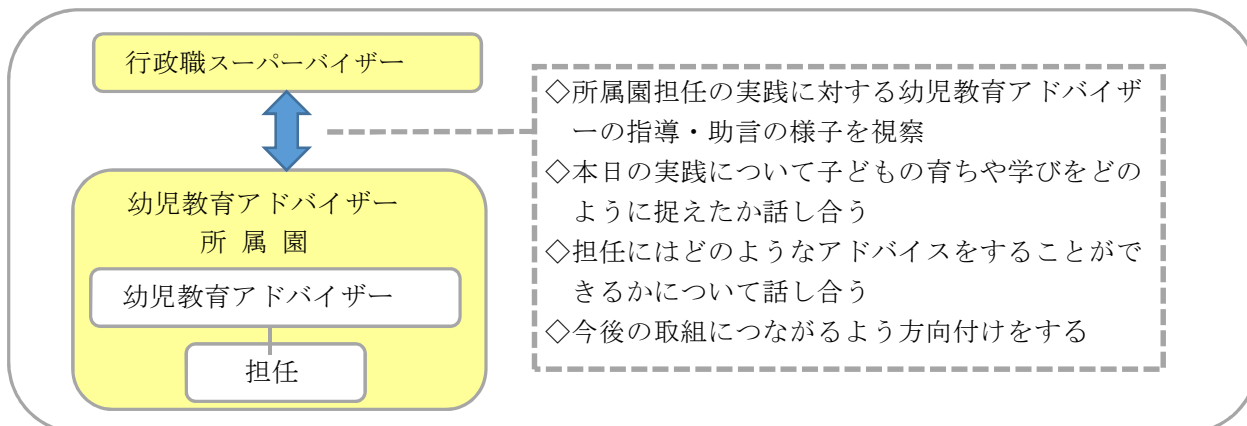
- 自分なりの読み取りをしておくことで参加者の意見に対応できると感じた。
- この事例がカリキュラムのどの内容に含まれるか、この時期の発達に応じた内容や援助がなされていたかなど、確認しながら進める。
- 各園代表の参加者が、園で話し合った内容を出し合い、選出した事例の読み解きと一緒にいき、たくさんの意見が出せるようにする。
- 作成者の思いをくみ取りながら、読み手側から分かりやすく書き表されているかを考え、意見を出せるようにする。
- 事例選出のポイントしっかりと掴んでおかないと、読み解きが深められないと思うので、事例の特徴を焦点化しておく必要がある。
- 参加者の意見から話し合うポイントをつかみ、深く議論できるようにする。
- 参加者一人一人が発言でき、みんなで深めていけるように言葉をかけたり、方向付けしたりしていく力が必要であると感じた。
- 意識したこと
 - ・限られた時間をうまく配分し、各々の思いを十分出してもら
 - ・グループとしての意見をまとめる
 - ・グループで意見をまとめ、ポイントを絞りわかりやすく報告する

— スーパーバイザーから事例添削についてのアドバイスを受けて分かったこと —

(問い)スーパーバイザー(園長)から添削についてアドバイスを受けたことで、指導助言に関する気付きや学びがありましたか

- 伝えなければならないことは、明確に相手に伝わるようにすることや視点の持ち方について、分かりやすく指導していただいた。
- 奥深い見取りと共に、言葉の選び方や思いが伝わりやすい添削の仕方を学んだ。
- 自分の読み解きが正しいか不安だったが、スーパーバイザーに添削していただき、自信につながった。気づくことができなかつたことも具体的に学ぶことができた。
- 活動の様子に援助が入っている等記入の仕方
- 自身の目線で気付かなかつた事を、スーパーバイザーに指導・助言をいただいたことで、次の読み解きにつながっていった。
- 普段あまりかかわることのない乳児の事例の添削をおこなったのでスーパーバイザーから発達年齢に応じた記入の仕方を直接指導してもらい分かりやすい。

②自園での指導助言への行政職スーパーバイザーによるアドバイス



(問い) 行政職スーパーバイザーからアドバイス等を受けることで、カリキュラム解説実習を行う際の安心感や理解度の向上につながりましたか

- 実践者の理解が深まるように作成し、何度も読み返しながら、実践の具体例を入れながら伝えていく。
- 解説後、具体的にアドバイスを受けられたことで、自身の課題が明確になった。
- スーパーバイザーの解説へのアドバイスは、よりわかりやすい解説にする為に参考になった。(乳児期の経験が幼児期にどうつながるのか等)
- スーパーバイザーのサポートは、安心感につながった。
- 担任に「何をさせたいか」「子供は何をしたいのか」について、具体的にアドバイスをすることを学んだ。また、助言するためには、様々な実践を参観して指導案や事例などの自身の知識を増やすことも大切であることも学んだ。
- 子供の発達や実践内容、援助、環境構成などについて確認や改善点を見出す。
- こども園への移行に向け、実践内容の充実と、実践者の意識改革等が重要である。

4) 実践の指導：カンファレンスの進行と統括

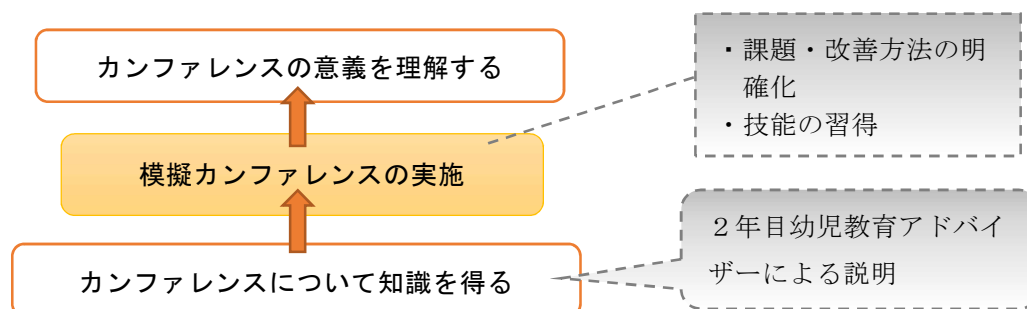
講座 10 カンファレンスの進行と統括の要点

<目的>

- ・カンファレンスの進行と統括に関して、知識を習得し、技能を向上させる。
- ・カンファレンスの目的、内容、組織、全体での共有の仕方について理解を深める。

<方法>

- ・講義
- ・ワークショップ形式



<内容>

◎2年目幼児教育アドバイザーがアドバイザー受講者に以下の点について、講習やカンファレンスリーダーを経験した中で学んだこと、課題について話をする。

○カンファレンスの目的と内容について

○カンファレンスの組み立て方

話題 ・今日の実践で、ここでの「問いは何か」を見極める。

・「問い」の絞り込みと優先順位を決める。

○時間＝時間配分

序盤	2割	「問題の共有」
中盤①	6割	「実践者と参加者の意見や思いの同じところと異なっているところ」について探る。
中盤②		「対案の可能性の検討」
終盤	2割	「検討したこと」について押し広げて考える。 ・他の場面ではどうか。 ・参加者一人一人が自分のこととして考えているか

○参加者

- ・メンバーの組み合わせ（所属園・キャリア・どの年齢の担当等）
- ・実践の参観状況（参加者全員、実践を参観しているのか）
- ・カンファレンスのグループ内の実践者の有無
- ・人数や配置

○報告

- ・議論したことを全体で共有するためには、グループや全体として「価値がある」と考えられたことを優先的に報告する。
- ・「何を検討したか」「何がわかったのか」といった結論を明確にする。

○カンファレンスを経験して学んだことと課題について

【学んだこと】

- ・参加者の意見を取り上げながら、まとめるだけでなく、議論の方向性を明確にすることの大切さ。
- ・議論を深めるには焦点を絞って、別の角度から考えることや、他のやり方、見方も考えることを意識していくこと。

【課題】

- ・今現在、実施しているカンファレンスのやり方は、参加者の意見を引き出しやすく、一人で進めている感じがなかったので安心感につながる。しかし、問いや観点を紙面に記入することで話のポイントがずれにくい一方で、いろいろな意見を出してもらって終わってしまう。

◎模擬カンファレンスの実施

奈良市の「こ幼保合同研修会」で行なわれたカンファレンスの付箋と当日の指導案を使用し、模擬カンファレンスを行った。アドバイザー受講者がカンファレンスの進行・統括を順に行った。

【模擬カンファレンス】

○カンファレンス・ボード4セットを用意する。

(4歳児：2セット 5歳児：2セット)

・ボードに当日の遊びの写真数点とカンファレンスで参観者がコメントを記入した付箋紙を貼っておく。

○アドバイザー受講者が3～4名ずつの2グループに分かれ、カンファレンスリーダーを交替で、一人当たり15分担当する。リーダーを担当するアドバイザー受講者は実践の問題の明確化・話題の焦点化に留意しながら進め、期の発達の姿や援助・環境構成、明日への実践につながるヒントについて議論する。

<グループ協議>

●講座に対する改善点・新方法 本日のカンファレンスの講座について企画準備して下さったが

- ・実際にカンファレンスを行っている映像を見ながら(先ほどのビデオで気づいた点が多かった)今日のように自分だったらどうするかなどの意見を出す。
- ・いろんな場面だったが、1つの場面について話し合う。
- ・カンファレンスという言葉 もう少しやわらかい言葉はないか。
- ・視点をしぼる(わかりやすい視点に。カリキュラム・指導案・当日の姿 全部は難しい)

●どんな力がつくのか(参加者が)

- ・より丁寧に見ようと意識がつく。
- ・対案を出してもらうことによって違う方法を知ることができる。
- ・いろんなとらえを知ることができる。
- ・なんで?という視点で見る。保育を見とる力がある。←
- ・発達とあっているのかを問い直していくこと。(司会者)
- ・みんなが見直す力につながる(参加者も司会者も)
- ・ねらいに対してどうだったかを考えることができる。
- ・議論できることが大切。

きっかけを出す

<幼児教育アドバイザーによる講習後のアンケート調査>

①カンファレンスを行う上でどのような点を意識して進行・統括を進めたか。

- 参加者の話を聞きながら、「何について話を深めていくのか」という視点を見つけ出し、話し合いを進めていくことを意識した。
- 参加者全員が発言できること。
- 話し合いの視点がぶれないこと。
- 話し合いの内容を視覚化し、まとめながら進めること。
- 様々な意見を出してもらえるよう、話しやすい雰囲気を心がける。
- 年齢のこの時期の子供の姿にそっているか等、ポイントをしぼる。
- ポストイットの意見を読み、重なっている箇所や似通っているポイントを整理して、そのことについて話し合った。
- 写真とポストイットと指導案を参考にカンファレンスをするのは、大変難しく、自分で想像しながら、進めて行った。
- 明日へつなげるための意見のまとめ方など。



②進行・統括を進める上で課題と感じた点について

- 参加者の意見が様々にあり、その話を聞きながら視点を見つけ出すことは難しいと感じた。ただ話を聞いていくだけではなく、事前にしっかりと自分なりの見方・考え方を持っておかなければ、方向付けはできないと思った。
- 様々な意見をもった参加者がいる中で、話し合いの視点・論点を定めていく事が大切。
- 参加者全員が話しやすい雰囲気を作りながらも、話をまとめていくこと。意見を導き出せるような投げかけ方や参加者が納得できるようなまとめ方など。
- その日の実践のポイントをつかみ、議論を深めることができるか。
- いろんな参加者の話を引き出し、話を進めながら焦点を決めて視点をしばって話し合いを進めることが課題だと感じた。
- 様々な意見を出してもらっただけで、深まらずに共有するにとどまる。
- 意見を引き出すために、明日につながる保育のヒントやどんな力につながっていくのかについて話し合えるように考えをまとめる。
- 限られた時間の中で進行、総括すること。
- 参加されている先生方の話を聞き出し、いろんな問いかけをしながら焦点を絞っていくことで、道筋をつくっていくには、焦点を当てる力や、ねらいやテーマを自分なりに持って臨む必要性を実感した。
- どこがポイントか、参加者が分かりやすいポイントの分け方や見出しの付け方の工夫。

③次回に向けて、課題を改善するのにどのようなことに取り組んでいくか

- 様々な研修でのグループ討議は、「人の話を聞きながら統括する」という経験ができるので、積み重ねていきたい。
- 過去の事例集などを読み解いたり、自園で保育にはいり、適切なアドバイスを重ねていく。
- たくさんの方に意見を出してもらいながら、論点を定めていけるように、初めにいくつかの視点を明確化する。
- カリキュラムを熟読し、年齢や期ごとの発達や実践について認識を深めておく。
- 園内研修等でカンファレンスの経験を積んで行く。
- 経験年数にかかわらず、カンファレンスに参加者の意見をうまく引き出し、まとめるだけではなく議論の方向性を明確にしていけるようにしたい。よかったことばかり出すのではなく、「なぜ？」という視点で見ることができるようになっていき、よりよい実践についてみんなで考えることができる時間にしていきたい。
- 自分が注目した所、参加者が注目した所に、焦点を絞っているいろいろな見方、考え方をだし合い発達の特徴等の話し合いが深まるようにする。
- どのような切り口で展開するのか。
- ポイントやねらいを進める前に整理をしておく。

④本講座を受講し、感じたこと、学んだこと

- 実際に経験されている先生にお話をいただいたので、とてもわかりやすかった。実際に経験されて、良かったことやつまづかれたことなど具体的に話をしてくださったので、とても参考になった。
- 自分が経験を積み重ねていかなければいけないことはもちろんですが、実際のカンファレ



ンスでの進行をしている際に一緒に入って横で具体的に指導して下さる先生がいてくださると、より勉強になるのではと思いました。

- 2年目の幼児教育アドバイザーが、自分が経験した、気付きや工夫したことを話されたことが、分かりやすかった。
- 実際に受講者とグループ討議をしたことで、互いに悩んでいることや、工夫していることなどが聞けたこと、また、カンファレンスを進める為に必要な力量を話し合えたことで、自分なりの意欲につながった。
- カンファレンスを充実するために「意見を引き出す」「焦点をしぼる」「意見をゆさぶる」「まとめる」ことができるようにしたい。
- 昨年度、カンファレンスの司会を初めて担当し、どのようにすすめていけばよいかとても戸惑ったが、今回の講座で進め方、組み立て方、効果的な報告の仕方などを詳しく教えていただいた。
- 改めて、カンファレンス進行の難しさと大切なポイント（意見をそのまま伝えるのではなく、1つのポイントを示し、）それについて話し合うことを再確認しました。

<課題>

- 実際の子供の姿を通して模擬カンファレンスが行えるように方法を改善する。
- 進行・統括をする上で、意識しておきたいこと等、自分なりの課題を見つけ、どのように改善したいか改善方法についても対策案を持つことができた。しかし、それらを実際に改善するには、やはり「実践」を通じた経験が必要である。



講座 11 カンファレンスの進行と統括の実際

<目的>

- ・カンファレンスの進行と統括に関して、知識を習得し、技能を向上させる。
- ・カンファレンスの目的、内容、組織、全体での共有の仕方について理解を深める。

<方法>

- ・「こ幼保合同研修会」に幼児教育アドバイザー、スーパーバイザーを配置
- ・幼児教育アドバイザーが、カンファレンスの進行・統括を行う
- ・スーパーバイザーは、幼児教育アドバイザーの指導助言・評価を行う

<内容>

◎年間実施計画

- 第1回こ幼保合同研修会：市立帯解こども園公開保育
- 第2回こ幼保合同研修会：市立富雄第三幼稚園・富雄保育園合同公開保育
- 第3回こ幼保合同研修会：市立朱雀幼稚園・朱雀保育園合同公開保育
- 第4回こ幼保合同研修会：市立六条幼稚園・京西保育園合同公開保育
- 第5回こ幼保合同研修会：市立神功幼稚園・神功保育園合同保育の視察、講演会

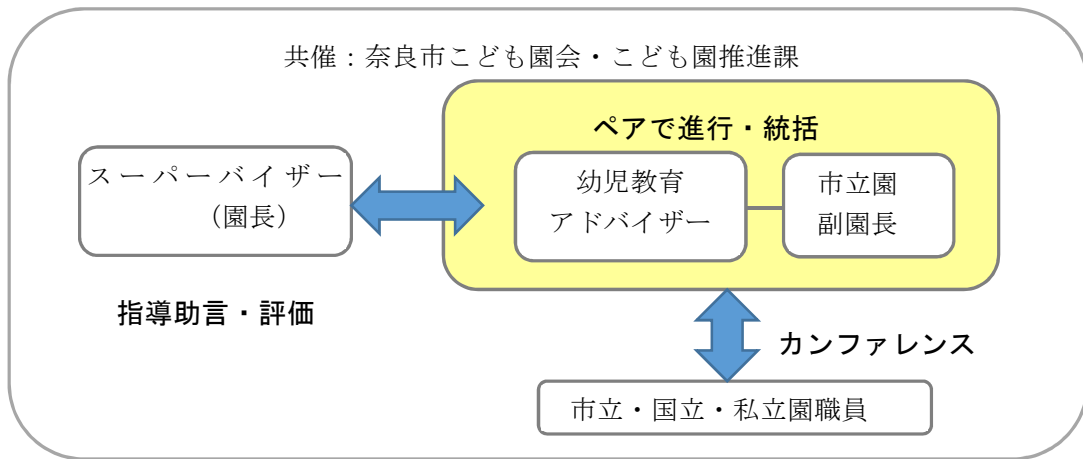
◎研修日程例

公開保育

- 9:00～ 公開保育及び参観
- 11:45～12:15 ポストイット記入時間
- 12:15～13:00 昼食（13:00 まで参観可能）

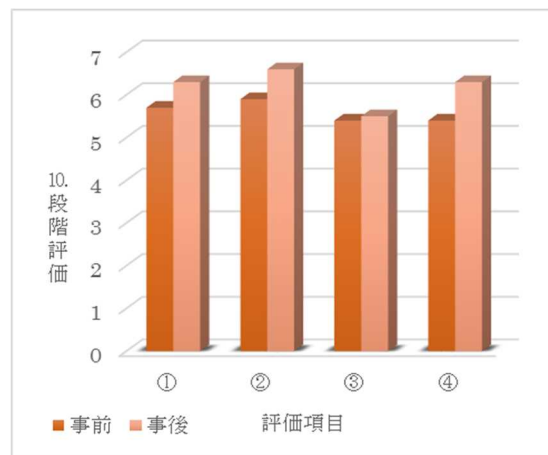
午後の研究協議

- 13:15～13:30 開会行事、日程説明
- 13:30～14:00 公開保育実施園による本日の実践の振り返り
- 14:00～15:00 カンファレンス（3，4，5 歳児のグループに分かれる）
- 15:00～15:30 グループ報告（6 グループすべてが報告）
- 15:45～16:45 講演（講師：学識経験者のスーパーバイザー）
- ～17:00 閉会、アンケート記入



<幼児教育アドバイザーの講習後評価>

①	カンファレンスに関して目的・内容・組織化・全体での共有の在り方について理解できましたか
②	カンファレンスの進行・統括をするにあたって、本日の講習を通して、その目的と役割について意識して実習に望めましたか
③	話し合いの中で、年齢に応じた発達の特徴やかかわりの視点で話し合えましたか
④	カンファレンスの進行・統括に関する知識・技能を向上させることにつながりましたか



<幼児教育アドバイザーの取組>

- アドバイザー受講者・スーパーバイザー・奈良市こども園会研修部会担当者が前もって打ち合わせを行った上で、アドバイザー受講者がカンファレンスの実習を行った。

<課題>

- 実際の研修の場でのカンファレンスが今後求められる。
- いろいろ出た意見をまとめ、子どもの姿・援助・環境構成から発達や学びを見通して焦点を絞って議論ができるような進行方法やまとめ方の工夫が今後さらに必要である。
- 事前・事後にアドバイザー受講者と、スーパーバイザーの打ち合わせをしているが、受講者の成長を継続的に捉えることが必要であったと考えられる。そのため、今後は、面接や園訪問を行っている行政職スーパーバイザーと情報を共有し、受講者の状況を把握しながらアドバイスしていくことが求められる。

